

# 夜刀神

Y  
A  
T  
O  
N  
O  
K  
A  
M  
I



著: 結城 らい



夜刀神 YATONOKAMI

上卷

【目次】

序章 悪夢

第一章 ヤトノカミ

第二章 開戦

第三章 一族の系譜

第四章 死線

## 序章 悪夢

いつも見る夢。

毎日のように見る夢。

それは、いつも亡き父の物語りから始まっていた。

幼い頃の断片的な記憶。あぐらを掻いた膝の上で寝転がり、

髪を撫でられながら、父の口から紡がれる話に、まだ小さかつた蓮実<sup>はすみ</sup>は耳を傾けている。

話の内容はわからない。

夢の中ではよく理解しているはずだが、目を覚ますと全てを忘れている。

十八歳になってから、その夢を見る頻度が多くなった。

十九歳になって、夢の内容に変化が現れた。

母が出てきて、蓮実に語りかけてくるようになった。女性としてのたしなみや、成人してから振る舞いなど、母はあらゆることを教えてくれた。

そして現在、二〇一二年。

二十歳になった晩に、初めて見た夢は――

座敷部屋で倒れている父。畳に、血溜まりが広がり、じくじくと染み込んでいく。

鮮血の滴る包丁を手にし、呆然と立っている母。

母は虚ろな目をこちらへ向けて、包丁を振り上げた――

## 第一章 ヤトノカミ

蓮実は悲鳴とともに跳ね起きた。

ベッドの軋む音。半開きになった窓から流れ込んでくる風。外はうっすらと青白く明るくなっており、ベッド脇の目覚まし時計を取ってみると、まだ朝の五時だった。

全身から汗を噴き出している。いやな汗だ。シャツもパンツもべっとりと肌に貼りついている。

蓮実はベッドから下り、下着姿のまま冷蔵庫へ歩いていき、1リットルパックの牛乳を取り出した。コップに入れることなく、そのまま口をつけて、喉を鳴らして飲む。半分ほど飲んだところで、口についた牛乳を手の甲で拭いた。

風呂場のドアが開いており、ちょうど、鏡に自分の姿が映っている。

肩甲骨あたりまである長い黒髪。それほど大きくない胸。シヤープな印象と褒められたが、自分としてはあまり好きじゃない細面。全体的にはバランスよく、周りからは美人と言われているが、蓮実はそんなに自身を美しいと感じたことはない。そのわけがずっとわからなかったが、先ほどまで見ていた夢のおかげで、何となくわかった。

母と似ている。

途端に、鏡の中の自分が血まみれになっている映像が見えた。幻視、というにはあまりにも実感を伴うビジョンだ。

吐き気を覚え、その場にしゃがみ込む。

精神科の先生は、記憶の奔流と称した。何らかの原因で封じ込めていた記憶の欠片が、ちょっとしたきっかけで蘇った瞬間、パズルのピースがはまったことで全体像がクリアになり、怒涛の如く一連の記憶が蘇ってくるのだと、教えてくれた。

そして、あたかも現実のもののように、幻が目の前に現れるのだとも。

「何があったの……？」

痛む頭を押さえ、蓮実は頭を振った。

「父さんと母さんの間に、何があったの？」

ひとり呟くその言葉に答えるものは、誰もいない。

いま、この瞬間は。

※ ※ ※

いつもの病院には、予約時刻の三〇分前に入った。

蓮実は、シヨルダーバッグの中から文庫本を取り出し、とにかく活字に集中することで、逸る気持ちを抑えようとした。

が、それも長続きせず、あえなく失敗に終わってしまった。

次に、待合室に置いてあるバーチャル水槽や、柔らかなクリム色に包まれた室内空間に目をやることで、多少なりとも気を紛らわせようと試みた。

コポコポと音を立てている水槽に気を巡らせながら、やはり三〇分も早く来たのは間違いだたと蓮実後悔していた。しかし、マンションの部屋でじつとしているのも耐えがたかったので、こればかりは仕方がない。

「長峯<sup>ながみね</sup>さん、お待たせしました」

診察室から看護師に呼びかけられて、蓮実は席を立った。

中に入ると、担当医師の御笠<sup>みかさ</sup>がこちらを向いて待ってくれていた。その顔を見るなり、蓮実はすぐに本題へと入った。

「先生。とても大事なことを、思い出したかもしれません」

御笠は端正な顔を微かに動かし、が、特に何の表情も浮かべることなく、



「そう」

とだけ返してきた。その冷静な反応に、蓮実は若干気持ちが萎えた。同時に、居ても立ってもいられなかった気持ちが、かなり静まってきた。

蓮実はやや身を強張らせながら、椅子に腰かけた。

「それで」

御笠はノートを開き、ペンを右手に持つと、正面から蓮実の目を見据えてきた。

「具体的に、何を、どうやって思い出したのか、説明してくれるかな」

それが本当に正しい記憶かどうか定かではない——と前置きをした上で、蓮実は昨晚見た夢の内容を語り始めた。

「すると、夢に出てきたのは、お母さんがお父さんを刺している風景、ということだね」



「はい」

ショッピングな内容を随分とはつきり言ってくれるな、と蓮実は眉をひそめた。

「それは、君が何歳くらい頃か、わかるかな」

「さあ。よくわかりません」

「えっと、周りの家具は？ 箆筒とか、テーブルとか、どれく

らいの高さで見えた？」

「たしか私のそばに洋服箆筒がありました」

「そこから自分の背丈を思い出せないかな」

「先生」

「うん？」

「まるで警察の尋問みたいです」

「いやだったかな？」

「ちよっと。それに、いつもと違うな、って」



「変化があつたからね」

御笠はペンでトントンと自分の頭をつつく。

「これまでの夢は、亡くなったお父さんとお母さんが登場して、ただ話しかけてくるだけだったよね。ところが、今回は大きな変化が現れた」

「その後、のことですか？」

「昨晚、君が見たという夢の内容は、もしかしたら君が十一歳までの記憶を無くしてしまった、その原因となる出来事、そのものかもしれない。そう考えると――」

「先生」

蓮実は片手を上げて、御笠の言葉を制した。

「先生はいつも私にショックを与えないようにと、慎重に、言葉を選んで接してきてくれました。それが治療方法だと、私は理解しています。ですが、今日は、少し急ぎすぎです」



あまりストレートに言われると、平静でいられそうにないから、怖かった。

しばらく沈黙が流れた。

「ごめん」

御笠は素直に謝った。

「たしかに解決を急いでいた。すまない」

蓮実 は正面から御笠を見据える。長髪を頭の後ろで束ねて、甘いマスクで、歴の浅い新人。どうにも頼りない。他の先生が担当ならよかったのに、と溜め息をつく。

「とりあえず、順を追って、再確認させてください」

相手のノートを指差す。

「なんだか君のほうがお医者さんみたいだね」

御笠は苦笑しながら、ノートを蓮実のほうへ向けてやり、ペンを手渡した。

プロの医者は何を情けないことを言うのか——と、蓮実は若干腹を立てていたが、無視して、わかっている範囲で自分のこれまでを年表形式で書きこんだ。

一九九二年七月七日。茨城県の玉造町にて誕生。

一九九九年。小学校入学。

二〇〇二年～二〇〇五年の記憶が一部ない。このころ両親が亡くなる。

二〇〇五年。叔父夫婦に引き取られる。

二〇一〇年。夢を見始める。父の夢。

二〇一一年。大学入学。母が夢に現れ始める。

二〇一二年七月七日～八日の夜。夢の中で母が父を刺す。

ノートにまとめられた情報を目にして、御笠は嘆息した。



「ご両親の亡くなられた時期は、聞かされていないんだったね」

「ええ。叔父さんは、気持ちの整理がついてからと」

「でも、何周忌とか、そういうものをやるから、わかるものじゃないのかな」

「ですから、先生」

じろり、と蓮実は睨みつける。

「どうしてそういうデリカシーのないことを言うんですか」

「悪い。だけど、これくらいは教えてくれないかな」

「私が、いやだからです。ドラマを見ていても、本を読んでいても、両親の死を連想させる描写があると、すぐ吐いちゃうんです。それに加えて、昨日の夢です。両親がいつ死んだか、どうやって死んだか、記憶を掘り返すのが、怖いんです」

「だけど、知りたいからこそ、こうしてクリニックに来ている」  
あくまでも飄々とした態度は崩さず、御笠は反論してきた。

ここで御笠は今日初めての笑みを見せた。ぞくりとするほど色気のある笑い方。二六歳という若さを、さらに若く見せる優男の顔で、屈託なくほほ笑まれると、男に免疫のない蓮実はずと詰まってしまう。

「そういうこと……ですね」

素直に認めざるを得ない。

両親はなぜ死んだのか。失われた自分の記憶にどんな秘密が隠されているのか。それを確かめたいという気持ちには、抗いようがなかった。

※ ※ ※

翌朝、蓮実は寝坊した。

今日は一限目からゼミがあるのに、つい二度寝してしまった。



「最悪」

いま所属している史学科は、第三志望だったから、それほど熱心に勉強しているわけではないけど、これまで無遅刻無欠席だったから、ここで遅れてしまうのは悔しいものがある。

シャワーを浴びてから、白のワンピースと黒いジーンズという、地味でパツとしないファッションに身を包み、マンションの部屋を飛び出した。

エレベーターを待っている間に、同じ階に住んでいる中年女性が出来て来た。やはり下に行くようだ。

よくマンションの中で会う人だ。蓮実は密かに心の中で「デラックス」とあだ名で呼んでいる。ずんぐり太っており、ちょっと身動きするだけでひいふうと息苦しそうにしている。

「こんにちは」

「あらあら、こんにちは。ええと、たしか」

「一〇一二号室に住んでる長峯です」

「そうそうそう！ ダンナとね、いつも話してるのよ。とっても綺麗な子がいるって。背も高いし、モデルさんみたいねえ、って。やっぱり綺麗ねえ。うらやましいわあ」

容姿について褒められたが、蓮実は特にお礼は言わなかった。この手の話題は苦手だ。

「ねえねえ、興味があつたから聞きたいんだけど、カレシとかいるの？」

「いえ」

「あらま、もったいない。モテそうなのに」

「私、あまり目立たないですから」

と、ずれた眼鏡を指で押し上げて、位置を直した。近視の蓮実は、普段は眼鏡をかけている。銀フレームのあまり色香のないデザインだ。



エレベーターが来て、乗りこんでから、デラックスは話題を変えた。

「ダンナがねえ、スカイツリー行こうって。ほら、うちって新しいものの好きだから。長峯さんは行かないの？」

そういえば、そんなものがあつた。今年の五月に、墨田区に出来た新しい東京のシンボル。東京タワーが好きな友人がなんだか文句を言っていたけど、あまり高いところに興味のない蓮実はどうでもよく思っている。

「私はあまり興味ないです」

「あら、どうして？ お友達と一緒にいくとか、すればいいじゃない。ああ、そうよ、誰かデートに誘えばいいのよ」

なぜデラックスにパートナー作りの極意を伝授されないといけないのか。蓮実は大仰に溜め息をついたが、デラックスは別の方面に勘違いしたようだ。

「長峯さん、スタイルいいし、美人だし、大抵の男は簡単に、コロツといっちゃうわよ」

やたら長く感じるエレベーターの中で、今度から、なるべくデラックスと遭遇しないように注意しよう、と蓮実は強く思っていた。

※ ※ ※

大学のゼミ室に入ると、まだ教授は来ていなかった。

「お、これで全員」

ゼミ長が、浅黒い肌の顔にニカツと笑みを浮かべた。他七人いるゼミ仲間達は、ある者は本を読み、ある者は携帯ゲームをやり、それぞれ勝手気ままに時間潰しをしている。

「教授は？」

尋ねると、机に突つ伏して寝ていた三つ編みの女子が、顔を上げて眠たげに答えた。

「二日酔いだって」

「二日酔い？ あの人、やる気あるの？」

呆れてかぶりを振る。と同時に、蓮実はホツとしていた。教授自身が遅刻しているのだから、文句は言わせない。自分の定位置に座り、先日の講義で配布された資料をバッグから出すと、机の上に並べた。

今期のテーマは、「風土記ふどきを読み解く」。

日本の古代史を研究する上で欠かせないのが、各地方ごとに編纂された風土記の数々である。西暦七一三年、詔勅により編纂された各風土記には、通史だけでは調べることのできない様々な記述が載っている。ただ、現在は五ヶ国分しか残っていない。



その中でも、教授のお気に入りは『常陸国風土記』だ。

史書というより、もはや文学。それゆえに生き生きとした当時の空気感を肌で感じる事が出来る、と教授は熱弁を振るっていた。

「常陸、か」

資料の一番上に置いた『常陸国風土記』の一説をコピーしたプリントを見ながら、思わずひとり言を呟く。

隣に座っているゼミ長が顔を向けた。

「そういえば、長峯は茨城の出身なんだろう？ 課題、それにしたらどうだ？」

「う、ん」

歯切れ悪く答える。

『常陸国風土記』の資料を教授からもらって以来、ずっと頭から離れない、あるキーワードがある。

夜刀神。やとのかみ

蓮実の生まれた玉造町——いまは行方市——に伝わる伝説。たまつくりまち  
一部の記憶を失っていても、小学校の頃教わったこの話だけは、よく憶えている。

六世紀。まだ関東が未開拓だった頃。時の権力者により討伐され、住処を追われた神々。その姿は蛇身、うっかり夜刀神を見てしまった者は一族もろとも呪われるという。

掌の中に汗が滲んでいる。いつか、学校とは別の場所で、この夜刀神のことを聞いたような気がしてならない。

## 『夜刀神』

突如、夢の中に出てきた父の声で、その単語が脳内に再生された。

蓮実はびくんと体を震わせる。そのまま何かを思い出せそうな気がしたが、残念ながらあと少しのところで、記憶は、具体的な像を結ばなかった。

夢の中で、父は、夜刀神のことを話していたのだろうか？

それにしても、幼い娘に聞かせるような話でもない。大したオチはなく、ただ蛇神が住んでいた場所を追いやられたという、それだけの内容だ。

伝説ではこう書かれている――

※ ※ ※

古老はこう伝える。継体天皇の時代、箭括やはさの氏麻多智うじまたちという者がいた。この者は郡の役所の西方にある谷を専有して、開墾し、新たに田んぼをひらいた。



このとき、夜刀神が群れをなして仲間とともに、そのすべてがやって来て、あちこちで妨害を行い、田んぼの耕作をさせないようにした。

土地の人々が言うには、「蛇のことを夜刀神と呼ぶ。その形は、体は蛇で、頭に角がある。みんなで逃げるときに、一人でもその姿を見てしまえば、その一家一門は破滅し、子孫も断絶してしまう。大体において、この蛇は、郡の役所の近くにある野原に多く住んでいる」とのことだ。

夜刀神の行為に麻多智は怒り狂い、甲冑を着けて、自ら武器を手にとって、蛇どもを打ち殺し、追放した。それから、麻多智は山の登山口に標識として杖を立てて、夜刀神に宣告した。

「ここより上は神の土地とすることを許す。そして、ここより下は人間の田園とする。今後は私が神を祭る役目を負い、お前たちを末永く祭ろう。だから、崇るでないぞ、恨むでないぞ」

麻多智は、社を建て、夜刀神を祭り始めた。そして、さらに一〇町ほどの田んぼを耕した。麻多智の子孫は代々受け継ぎながら祭りを行い、いまに至るまで絶えず続いている。

その後、孝徳天皇の時代、壬生連<sup>みぶのむらじまろ</sup>麿という者が谷を占領して、池の堤を築き上げた。

そのとき、夜刀神が現れ、池のほとりの椎の木にのぼり集まって、いつまで経っても去ろうとしなかった。

麿は大声で言い放った。

「この池の修理をするのは、我らが民のための事業である！  
どこの神だ、大王の教化に従わない者どもは！」

続けて、工事の人夫たちに告げた。

「目に見える範囲のすべてのものを、魚でも虫でも、かまうことない、殺してしまえ！」

たちまち、夜刀神は、逃げ隠れてしまった。

※ ※ ※

最初は麻多智という男により、田んぼを荒らす夜刀神は撃退された。さらに後年、壬生連磨という男によって夜刀神はまたも虐げられた。

その後、夜刀神がどうなったのか、定かではない。

なんであれ、気持ちのいい話でもなければ、含蓄のある話でもない。ただ権力者の横暴を記しただけの物語である。

「おはようふわあ」

もう講義終了の間際になってから、あくび混じりに教授がゼミ室に入ってきた。無精髭が生えているが、これは寝坊したからではなく、単にいつも剃っていないだけのこと。

ゼミの教授、水沢豪。



彼は、日本人離れした彫りの深い顔をしており、外見は悪くないのだが、素行に問題があるので有名だ。宴席となれば、やたらめったら女の子にキスをしようとし、挙句の果てには教える子の肩を抱いてホテルへ連れこもうとしたこともある。

「遅いです、先生」

ゼミ生の一人が文句を言った。

「すまん。ちよつとホテルで寝過ごしてな」

教授は片手で拝みながら笑顔で謝った。ちつとも悪いとは思っていない様子だ。やけに表情が晴れやかなのを見ると、ホテルで誰かと一晩過ごしたのかもしれない。あまりにも行動が自由すぎる。

終了のチャイムが鳴った。

「あら、終わっちゃったな」

他人事のように周りを見回している教授。

「ま、いいか。課題書いてるやつから、途中でもいいから、とりあえず提出してくれ」

投げやりな物言いに、ゼミ生達は呆れ顔で肩をすくめながらも、教授に課題のプリントを提出する。渡し終えた者から順に、部屋を出て行く。

最後に、蓮実だけ残った。

「ん？ 長峯、お前はどした？」

「すみません、まだやっていません」

来週から試験期間に入る。提出するタイミングは今週の木曜日、前期最後のゼミしかない。この時期になっても課題が完成していないのは単なる蓮実の怠慢だ。

「おいおい、どうするんだ。あと実質三日しかないぞ」

「徹夜して頑張ります」

「そんな適当なレジュメ渡されてもな」

適当な講義しかない男が何を言う、と蓮実は言い返してやりたかったが、抑えた。

「題材は決まってるのか」

「『常陸国風土記』にします」

「あれか。しかし三日で仕上げるには骨の折れるやつだぞ。風土記の中でも堅苦しい文章のくせして、比喩的な表現が多く、史書よりは文学に近い作品だ。書かれていることの解釈だけでも相当な時間がかかる」

「それでも、やります」

「しょうがねえなあ」

バリバリと無精ヒゲを掻き、困り果てた顔の教授だったが、やがて頷いた。

「よし、わかった。俺の部屋まで来い。個人指導してやる」  
「えっち」



蓮実は自分の身を抱き、ジロリと睨みながら、教授から距離を置く。

「おい、ちょっとは俺を信じろよ！　そこまで見境ないわけじゃないんだぞ！」

「信じられません。ゼミの最初の飲み会で、私に向かって『金を払うから踏んでくれ！』とカミングアウトしていたのは、どこのどなたでしたっけ」

「あの時は出来心だっ」

「胸張って威張らないで下さい」

バッグを持って、ゼミ室を出ようとする。慌てて教授が前に立ち塞がってきた。

「わかったわかった。ヘソ曲げるな。下手なレジュメを出されてもかなわん。いまこの場でアドバイスだけしてやる」  
「お願いします」

「まったく、課題間に合いそうにないお前が悪いのに、なんで俺のほうが……」

文句を言いつつ、教授はホワイトボードにマーカーを走らせる。そこに記載された単語を見た瞬間、蓮実は険しい表情になった。

「それに絞れと？」

「あのな、『常陸国風土記』全部調べる気か？ 量が多すぎて収拾つかなくなるぞ。他のやつらだってテーマは絞っている。お前も少しは頭を使え」

「本当にこのネタだけで書き切れるんでしょうか」

「おう。一番書きやすいのがこいつだ。もう少しヒントをやる」と、蛇神信仰と絡めて書け。そうしたら原稿用紙一〇枚分なんてあつという間に書けるだろ」

もう一度蓮実はホワイトボードに目をやった。

夜刀神。

その三文字の漢字が、禍々しいものとして、目に映る。

「ところで、最近は体調悪くなったりしないのか」

廊下に出る時、教授が後ろから声をかけてきた。振り返ってみると、神妙そうな表情で、こちらを見ている。

「たまに、まだあります」

「そうか」

教授はあさっての方向を見て、独り言を呟くように、口をもごもごと動かしだした。

「まあ、その、無理するな。いざとなれば俺の裁量で——」

「不正は嫌いです」

自分の抱えている問題を憶えてくれていたことに、ちょっぴり嬉しさを感じながらも、教授の助け船をピシヤリと跳ねのけ、蓮実はゼミ室を出ていった。

その日の講義が全て終わり、まっすぐマンションへと戻った。一度荷物を置いてから、新大久保の駅まで戻り、近くの韓国料理屋で軽く夕食を済ませる。

「チェさん、ほら、見てよ」

常連客が、カウンターの奥にいる店主に、新聞の一面を見せている。食べ終わって水を飲んでた蓮実は、何が書かれているのかと、覗き込んだ。よく見えなかったが、常連客の言葉で、大体の内容は推測できた。

「よりによって外務省による暴言だぜ。韓国人を馬鹿にする」

「私らのこと、何だと思ってるのかね」

「同じ人間って思っていないんじゃないの。まともな神経してたらさ、天罰だの、熊襲<sup>くまそ</sup>だの、まあ暴言は吐かないわな」

「クマソ？」

「知らないか。昔、誰だったっけな、やっぱ政治家が言ったんだよ。『東北は熊襲の土地』だって。熊襲ってさ、大昔の日本に住んでたって一族。要は、野蛮人ってこと。バーバリアンだよ、バーバリアン」

「同じ日本人に、よくもまあ。信じられないよ」

「しかも間違ってるし。東北は熊襲じゃないんだよ」

「何なの？」

「たしか蝦夷えみしだったかな」

「エミシ？」

「俺もよく憶えてないから、あんま突っ込むなよ。そんなのどうでもよくって、要は、酷いよな」

「うん、酷い」

ちようど店内のテレビでもニュースで流れたので、ようやく何が起きていたのかを知った。



外務省の人間が、『韓国人は猿真似が得意だから』と、公式の場ではないとはいえ、とある宴席で発言してしまったそうだ。そのことが波紋を呼び、在日韓国人団体から謝罪の要求が来ているとのことで、ちよつとした揉め事になっている。

「ばっかばかしい」

最初から人の尊厳を踏みにじるような発言さえしなければ、何も問題など起きないのだ。日本人だけがアジアで一番偉くて優秀な民族とでも思っているのではないだろうか。

※ ※ ※

シャワーを浴びてから、新しいパンツをはき、シャツを着る。ズボン等のはかかない。一人で部屋にいる間、このだらしない格好で過ごすのがすっかり習慣付いてしまった。

ガラステーブルの上でスリープモードに入っていたノートパソコンを開き、あぐらを掻いて、さて、とばかりにレジュメの作成に取りかかる。

蛇神信仰の変遷。蛇神信仰とは、すなわち水の神信仰でもあり、治水にかける人々の情熱の現れでもある。

それが時とともに山の神信仰へと移っていき、蛇神は古い神として、あるものは目立たない場所へ隔離され、あるものは邪神として疎まれ、勢力を削られていった。

そこらへんの基礎知識はあるので、あとは『常陸国風土記』における夜刀神の描写と比較しながら、自分なりの解釈を書いていけばいい。

正直、原稿用紙十枚分も書くことがあるのか不安だが、いざとなればハツタリだけで文章を水増しするという手もある。

「ん」

一時間かかって、原稿用紙三枚分ほど書いたところで、軽く背伸びをし、それから冷蔵庫に入っている缶コーヒーを出して、立ったまま飲み干した。

おもむろに、ベッド横の窓から、外を眺めてみた。

新宿の高層ビル群が見える。

夜一〇時だから、不夜城はまだこれからといったところ。今年の五月に開業して話題のスカイツリーは反対方面だから、蓮実の部屋の窓からは見えない。そもそも、新大久保からでは、相当高い階でもなければ見ることはかなわないだろう。どうでもいいことだが。

ベッドから下り、再びレジュメ作業に取りかかる。

ガラステーブルの上に置いてあった携帯電話が振動した。電話の着信だ。見ると、小学校のとき同級生だった浅井夕華からだった。以前の同窓会で番号だけ交換していた。

電話に出た瞬間、やたらハイテンションな声が耳に飛び込んできた。

『ねえねえねえ、蓮実！ 新宿で、小学校のクラス会やってるんだけど、来ない？ 来るよね！ 来てよ来てよ！』

「飲んでるでしょ、夕華」

『えっへへー、ジョッキ生五杯くらいですよーだ』

「飲みすぎ」

『てかさあ、いいじゃんいいじゃん。一駅なんだし。来てよー』  
「大学の課題があるから。単位かかっているの」

『いいっていいって、そんなの！ 教授さんも許してくれるよ。それに蓮実くらい美人だったら、ちよつと色目使ったら、Aマイナーくらい取れるんじゃない？』

その言葉に、蓮実は顔をしかめた。

「そんな不正手段、私は――」

『ねえねえ、付き合つてよお。リョーヤくんも来てるからあ』

「だから、何度頼んでも」

言いかけた蓮実は、はたと止まった。

「リョーヤ……？」

『んにゃ？　どうかしたのー？』

口に手を当てて考えた。

彼が、来ている？

小学校の頃と同級生とは会いたくない。叔父さん夫婦からも反対されている。自分の過去をよく知っている者たちであり、意図せぬタイミングで記憶を呼び覚まされるかもしれないからだ。一度同窓会に参加した時、明らかに、彼らは自分の過去について触れようとしなかった。そして、自分も聞く気はしなかった。

でも、桐江涼夜きりえりようやが来ている。



あの桐江涼夜が。

『蓮実？ 蓮実ちゃん？』

「ごめん。やっぱり行く。待ってて」

『あーん、だから好きー！ 好き好き大好きー！ 結婚してー！』  
電話の向こうで嬌声を上げる夕華を無視して、蓮実は電話を切り、出かける支度を始めた。

歌舞伎町の店に着き、中に入った蓮実は、個室まで通された。掘りごたつ式の畳の部屋。茨城から東京へ出てきている人間だけでの集まりなので、五人くらいしかない。

座席奥の中央にいる人物を見て、息が止まるかと思った。

初恋の人が、焼酎グラスを片手に、和やかに談笑している。大人になったことでより格好良さが増した。肌は色白で線も細いが、男らしい顔立ちをしており、スマートな美しさがある。

「いらっしやーい！」

千鳥足で寄ってきた夕華が、蓮実に絡みつく。しっしっ手  
で払う。夕華は、ロングの茶髪にウェーブをかけて、いつもは  
もうちょっとオシャレに気を遣っているが、今晚はかなり飲ん  
でいるせいか髪が乱れている。

「ああ、長峯さん」

涼夜はパツと顔を明るくし、立ち上がった。

「待ってたよ。こっち空いてるよ」

「えー、私がいるのにー」

隣に座って涼夜と親しげに話していた女子が、ほっぺたを膨  
らませる。名前と顔が思い出せない。やはり彼が好きだった同  
級生だろうか。

「ごめんね。長峯さんと話すの久しぶりだから、ちよつとだけ」  
「はーい」

ふくれ面の女子は席を移動し、もう一人の男子の横へと行く。すぐに華やいだ表情に戻り、ぺちやくちゃとお喋りを始めた。

「元気にしてた？」

「それなりに」

涼夜の言葉に対して、知らず知らずのうちに素っ気ない返事になる。自分のコミュニケーション能力の低さを呪いながら、運ばれてきたカシスオレンジのグラスを片手に持ったまま、懸命に次の言葉を絞り出そうとする。

「桐江君は、何してるの？ 大学？ 就職？」

「とりあえず大学に通ってるよ。就職は、学歴ないと厳しそうだからね」

「どこに通ってるの？」

「大学名は恥ずかしいから秘密。学部は教育学部。一応、図書館司書の資格は取ろうとしているよ」

「あれって倍率高いんでしょ」

「採用枠が少ないからね。でも、場所を選ばなければ、どこかしら需要はあるよ。意外と肉体労働系だし、憶えないといけないことが多いし、ものすごい人気の職業ってわけでもないから」

「一日中本を読んでもいいような仕事かと思ってた」

「まあ、最悪、一般企業に入るつもり。で、長峯さんは何を勉強してるの？」

「言ってもピンと来ないよ」

「教えて」

「日本の古代史研究。私がいまやってるのは『常陸国風土記』に出てくる夜刀神。わからないでしょ」

「へえ」

「気のない返事だな、と蓮実は感じたが、よく見ると涼夜の目が陰しくなっているのに気が付いた。」

「どうしたの？」

「――考え事」

「そういえば、小学校でもちよつと習ったことあるよね。地元の話で。桐江君も憶えてるの？」

「たぶん」

返しに切れがない。どうしたのだろうと疑問に思った蓮実が、  
なおも問おうとすると、ガシャンとグラスの割れる音がした。

夕華が酔っ払って床に落としたようだった。グデングデンに  
なつて、前後不覚の状態だ。

「あー、ひどいなあ」

涼夜はスタッフを呼ぶと、割れたグラスを片付けさせた。そ  
の間に、女子の一人が夕華の介抱を行っている。

夕華が何かを呟いた。声が小さくて聞こえない。自分の名前  
を呼ばれた気がして、蓮実は近寄ろうとしたが、



「いいよ、そのままにしておこう。お店の人がやってくれるよ」  
涼夜に言われて、引き下がることにした。

夕華は、自分を睨んでいるように見えた。だけど、それ以上深く考えるのはやめにした。

「彼女、あんなに飲むんだ」

涼夜は呆れたように肩をすくめる。

「私は夕華とたまに飲むけど、いつもはあんなじゃないんだけどね。今日はちよっと飲み過ぎ」

「ストレス溜まってるんじゃないかな」

そう言って、涼夜はグラスに口をつけた。

その横顔を蓮実は内心惚れ惚れとしながら見つめていた。

※ ※ ※

桐江涼夜という存在が蓮実の中で大きくなったのは、小学六年生の時、クラスメートにいじめられていたのを彼が助けてくれたからだ。

いじめられていた理由は、多分、両親に関わることなのだと思うが、思い出せない。無理に記憶を掘り起こそうとすると、頭が痛くなってくる。

とにかく、クラスの男子に言葉責めを受け、廊下の端でしゃがみ込んで泣きじゃくったところを、涼夜がその男子を殴り飛ばして助けてくれたことは憶えている。

温厚な性格の涼夜が暴力行為に及んだことで、同級生達は驚いていた。おそらく蓮実に対する男子の物言いがあまりにも酷かったのだろうが、それにしても度を越した反応だった。

誰とでも仲良くし、成績もトップクラス。物静かで礼儀正しく、しかし他人に卑屈になることは決してない。

物語の中の王子様が飛び出したような人で、自分みたい目立たない女子を気にかけることはないだろう、と蓮実は思っていた。

それは勝手な思い込みだったのだろうか。

本当は自分のことを意識してくれていたのだろうか。

そう考えると、胸が熱くなった。次第に、涼夜のことと頭が一杯になってきた。ずっと彼に側にいてほしかった。

だけど、蓮実は東京の中学へ通うことになり、涼夜は地元に残り、二人は離れ離れになった。以来、長く会っていなかった。

※ ※ ※

「夕華は偉いよ」

涼夜はグラスの中の氷をカランと転がす。

「彼女のような人が音頭を取ってくれるから、こうしてみんな集まれる。中学の時も、クラスを中心になって動いてくれたし」

「そういえば、夕華も、桐江君と同じ中学だったね」

「高校も一緒の私立高校」

「へえ、そうなんだ」

それは初耳だった。

「仲良くしてたの？」

「う、ん」

涼夜は少し齒切れ悪い感じになり、

「付き合ってた、からね」

蓮実にとって衝撃の事実を告白した。

「あ、そう……なん、だ」

目が泳ぐ。動揺を悟られまいとする。でも、動悸が激しくなるのだけは押さえられない。

ずっと想いを寄せていた人に、恋人がいた。しかも相手は自分の友人だ。そのことは、蓮実にとって、にわかには受け入れがたい話だった。

そして、さつき夕華が睨んでいた理由が、やっとわかった。

元恋人に接近している蓮実のことが、夕華は憎たらしく思えたのだろう。

終電近くなってから、会はやっとお開きになったが、その時間になっても夕華は回復することなく、完全に酔い潰れた状態で、涼夜にもたれかかっている。

肩車で夕華を支えながら、困った感じになっている涼夜は、蓮実に助け船を求めてきた。

「長峯さん、彼女の家の場所知ってるかな」

「えっと、前にアドレス交換したけど」



と、携帯電話のアドレス帳を調べてみるが、さすがに住所情報までは入っていない。

付き合ってたんじゃないの？ と意地悪いことを言いたくな  
ったが、やめた。きつと二人は高校の時に別れたんだと思う。  
じゃなかったら、久しぶりに会う、なんてことがあるはずない。  
「君の家、ここから近いよね。今晚泊まらせることができるかな」  
「泊まらせるのはいいよ。でも、私一人じゃ連れてけない」  
「僕も一緒に行く。家までタクシー使おう」  
言うやいなや、涼夜はちょうど近くまで来たタクシーを呼び  
止めた。夕華を後部座席に押し込んだ。

マンションに着き、涼夜と協力しながら、十階の自分の部屋  
まで夕華を運んでいく。ベッドに寝かせたところで、蓮実は溜  
め息をついた。

「ごめんね、桐江君。手伝ってもらって」

「気にしないで。あとは大丈夫かな？」

「うん。明日の午前中は講義ないから、平気」

そう言いつつ、緊張で心臓の鼓動が早くなっている。涼夜から言い出すわけではないので、自分から切り出さないといけない。「よかったら桐江君も泊まっていったら？」そのひと言が言えない。

「じゃあ、僕はこれで」

「あ——うん」

玄関へと向かうの後ろ姿をただ見ることにしか出来ない。涼夜がドアノブに手をかけた瞬間、ようやく口を開いた。

「あの、桐江君」

「なに？」

爽やかに振り返る涼夜。蓮実は携帯電話を取り出す。

「番号、教えてくれない？」

「いいよ」

お互いの連絡先を交換する。入ってきたデータを愛しげに守るように、蓮実は自分の携帯電話をきゅっと胸に抱いた。

「また今度遊ぼう」

「う、うん、また今度ね」

なんてことのない常套句に深い意味を感じそうになる。勘違  
いしてはならない、と蓮実はかぶりを振った。

涼夜が出ていった後、フローリングの床にマットを敷き、その上に横たわった。もうレジュメのことなどどうでもよかった。ほどなくして、眠りについた。

※ ※ ※

インターホンが鳴る。

蓮実は寝ぼけ眼をこすりながら、モニターのボタンを押した。マンションのエントランスに、スーツを着た老人と、同じくスーツ姿の若い女性が立っている。画面越しでも、鋭い視線が突き刺さってくる。不穏な空気を感じ取った蓮実は、若干動悸を早くしながら、「どちら様でしょう」と尋ねた。

老人は険しい表情を崩さず、画面の向こうで、警察手帳を開いて見せた。

『聞きたいことがある。上がらせてもらおうか』

やけに高圧的な態度。少しムツとしたが、まさか追い返すわけにもいかず、蓮実はロック解除のボタンを押した。

画面の向こうで、老人と若い女がマンションの中に入っているのが見えた。

時計を見ると、昼十二時前だ。

「あ、そうだ……夕華がいるんだった……」

ベッドの上を見たが、夕華の姿はどこにもない。荷物が無いから、起きるなり、さっさと帰っていったのだろうか。

「書き置きくらい残してくれてもいいのに……」

ブツブツと文句を言っているうちに、警察の二人が、蓮実の部屋までやって来た。

中へ通すと、一切遠慮することなく、二人は奥まで入っていく。不躺な態度にムツとしつつも、蓮実はキッチンまで行き、「お茶とコーヒー、どちらにしますか」と尋ねた。

「水で結構」

老人は傲岸不遜な態度のまま、短く言い捨てた。

「私も水でいいわ」

女も答える。敬語を使わない喋り方に蓮実は腹を立てそうになったが、気持ちを鎮めて、グラスをテーブルの上に置いた。

「どうぞ」

蓮実に促されるのと同時に、老人と女は椅子に腰かけた。

老人は六十代くらいだろうか。顔こそ老けているが、精悍で、肉体もスーツの上からわかるほど筋骨隆々としている。全体的にエネルギーに満ち溢れており、警察というよりも軍人のような雰囲気だ。

女もまたシャープなスタイルながら、逞しそうな体つきをしている。

「さて、本題に入ろう。浅井夕華を出してもらおうか」

「はい？」

いきなりの話に、蓮実は面食らい、眉をひそめた。

出してもらおうか、とは、どういうことだ。

「夕華は、確かに昨日、泥酔してうちに来ました。でも、私が寝ている間に帰ったみたいですよ」

そのことを話すと、老人はフンと鼻を鳴らした。

「匿うつもりか」

その高圧的な態度に、徐々に蓮実是不信感を抱き始めている。この二人はどこかおかしい。

表情を硬くした蓮実を見てか、女が話を引き継いだ。

「正直に答えて。彼女はいまどこにいるの？」

「知りません。さっきも言いましたけど、いつの間にか帰っちゃってたんです」

「隠し事をして、何の得にもならないわ」

女は決めつけるかのようにピシヤリと言い放つ。表情は感情を殺しており、冷たい。

蓮実は、怒りよりも先に、恐怖が湧き上がってきた。この人達は何者なのか？ なぜこんなにも高圧的な態度を取ってくるのか？ まるで物語に出てくる秘密警察のような連中だ

「隠し事なんてしてません！」

臆しては負けだと思った。

「それに何を疑われているのか知りませんが、少しくらい情報を伝えてくれてもいいじゃないですか。どうして夕華のことを聞いてくるのか、何も——」

「黙れ」

蓮実の文句は、老人の重く低く響き渡るひと声で、呆気なく中断させられた。

「何もわかっていないとは言わせない。お前は、我々がマークしている人物に、すでに三人も接触している。グレーどころか、限りなく黒だ」

老人は身を乗り出し、真正面から蓮実を睨んでくる。

「どうだ？ 素直に話したほうがいいのではないか？」

蓮実は身を引きながら、ひたすら首を横に振った。



この老人が何を言っているのか理解出来ない。自分のわからないところで、勝手に何かが進んでいる。巻き込まれてしまっている。自分は無関係だと主張したかったが、何と無関係なのかもわからない上、そんなことを言っただとしても聞き入れてくれなさそうな雰囲気がある。

やがて、老人は拍子抜けしたような表情になった。

「どうやら……本当にわかっていないようだな」

「演技では？」

「私の目を疑うのか。こいつは違う。己が何者であるかも理解していない様子だ。おそらく周りに守られているだけで、一切関わりを持たないようにされているのだろう」

「でも、放置しておくわけには」

「今日のところは許しておいてやれ」

老人は立ち上がった。つられて女も席を立つ。

二人が玄関前まで行ったところで、ようやく自分が解放されたのだとわかった。安堵の溜め息をつくとき、老人が振り返った。「ひとつだけ教えろ。大学で研究している内容、あれはお前が自主的に選んだものか？ それとも、誰かに指示されたものか？」正直に、教授に指示された、と答えようかと思った。しかし、老人の言葉で「それとも」がやけに強調されていたのが気になり、嘘をつくことにした。

「自分で、選びました」

「ほう……」

老人は目をすがめた。どこか楽しげな表情だ。

「血は争えぬか。知らぬとはいえ、あれを選ぶとはな」

そして二人は挨拶もせず、さっさと外へ出てしまった。

残された蓮実は震える手でテーブルの上のグラスを取り、流しへと持っていく。

ふと見ると、グラスの中の水は少しも減っていない。

思い返せば、二人はずっと、蓮実の出した水に口をつけようとすらしていなかった。

警察が去ってからすぐ、涼夜に電話をかけた。とにかく共通の友人に、話を聞いてほしかった。だが、圏外になっていて繋がらない。急に不安になってきて、とりあえず携帯電話をテーブルの上に置くと、部屋の中をうろうろと歩き回り始めた。

そして、冷静に考えたら最初に夕華本人へ電話をかけるべきだったと思い、もう一度携帯電話を取って、実際に試してみた。が、こちらも圏外だった。

溜め息をついて、電話をテーブルの上に放り投げる。

思い返せば、昨日の夜は様子がおかしかった。それこそ涼夜が言ったように、ストレスでも溜まっていたのではないか。

もしかしたら、夕華が警察にマークされているのも、そのあたりの事情があつてのことではないだろうか。

携帯電話が振動する。画面を見ると、涼夜からだ。

『電話くれた？ どうしたの？』

蓮実は事情を説明する。二人の警察官が訪問してきたことも伝えた。話を聞き終えた涼夜はしばらく黙っていたが、やがて低い声で喋り出した。

『その二人、たしかに警察だったの？』

「警察手帳は玄関で見せてくれたけど……」

『偽造なんて簡単に出来るよ。君は本物と偽物、区別つける自信はある？』

ない。わかる人が見れば明らかに違うデザインだとしても、本当の警察手帳なんて間近で見たこともない蓮実には、あれが正規のものだったかどうかなんて判断がつかない。

『これから会えるかな』

「午後の講義までなら」

『なるべくこつちを優先して。大学より、重要なことだから』  
びっくりするくらい有無を言わせぬ口調だった。

蓮実がその意図するところを問おうとする前に、向こうから一方的に電話を切った。どこで、いつ会うのか、何も指定していないのに。

と、メールが入ってきた。「戸山公園 スポーツセンター前十二時」と書かれている。

戸山公園は、このマンションから歩いて行ける。電車で行くよりも早く着くくらいだ。

時計を見ると、十一時半。シャワーを浴びて、着替えても、十分間に合う。

着ていた室内着のジャージを脱ぎ捨て、浴室に入った。

※ ※ ※

指定されたスポーツセンター前に行くと、ダークグレーのスポーツを着た涼夜が立っていた。日差しが強く、蟬の鳴き声やかましい日中だというのに、汗ひとつかかずにいる。

「ちよつと座ろうか」

促されて、蓮実は先導する涼夜の後について、開けた草地の一角にあるベンチまで歩いていった。

隣り合って座る。

「その警察らしき二人から、どこまで聞かされた？」  
さっそく涼夜から話し始めた。

「どこまで、って言う」と

「君が驚くような内容を口走ったりしなかったかな」

「驚く？ 桐江君の言ってる意味がわからない。突然の訪問には驚かされたけど、他は特に」

「何かを疑われているようだった、と言ってたよね。それが何か、わかった？」

「全然。思わせぶりなことばかり言って、詳しいことは何も喋ってくれなかった。なんだろう、警察らしくないとか……」  
口に手を当てて考える。

「秘密警察、って言葉のほうがちつくり来るような。そんな二人組だった」

呟くように言った後、沈黙が流れた。なぜ何も言わないのかと、涼夜のほうを見ると、真剣な眼差しでこちらを見つめていた。目が合う。恥ずかしくなって、蓮実は赤面しながら顔を背けた。

「なんで僕に連絡したんだ？」

いきなり詰問口調で責めてきた。

「だって、桐江君、夕華と付き合ってたみたいだから——」

「もう関係ない。大学に行く前に別れた」

「そんなこと、私知らないもの」

「夕華にはかけたの？」

「もちろん、電話したよ。でも出なかった。そうしたら桐江君から……そうだよ、私があなたにかけた時は、圏外だった。結局、桐江君のほうから連絡してきたんじゃない」

だから自分だけが悪いわけじゃない、と蓮実は主張をしたかった。涼夜が何をもって自分を責めているのか、わかっていなかったが。

涼夜は溜め息をついた。

「君に何か起きたんじゃないかと思って、慌てて電話したんじゃないか」



その言葉を聞いて、蓮実は胸が痛んだ。

自分を心配して、涼夜は電話をしてくれた。それなのに、いま、彼になんて酷いことを言ってしまったのか。

「……ごめん」

蓮実は謝った。

「気にしないでいいよ。僕の言い方がきつかったと思う。それに」

「それに？」

「君の勘は正しかったから」

「どういうこと？」

「僕に電話かけたことだよ。付き合ってたかどうかは関係なく、単純に、この件に関しては僕ほど連絡を取るのに適している人間はいない。なぜなら」

涼夜の声のトーンがやや低くなった。

「僕は、夕華の居場所を知っているから」

衝撃のひと言に、蓮実は目を見開いた。そこから推測されることはいくつかあるが、予断は廃して、ごく当たり前のことを言うだけにとどめた。

「じゃあ、警察に連絡しないと！」

「どうして」

「だって、夕華を捜しているから——」

「最初に言ったろ。本当にそいつらは警察だったのか？　って」

「でも、それは桐江君の勝手な——」

「勝手じゃないさ。もうひとつ言わせてもらうと、僕はそのことも知っている。彼らが警察を騙っている別組織の人間であることをよく知っている。だから、これは思い込みでもなんでもない。ただ事実を言っているだけだ」

「やだ……やめてよ。どういうことなの」

かぶりを振る。夏の日差し眩しい公園の中にいながら、冷え冷えとした地下牢に押し込まれて話をしているような、息苦しさで閉塞感。

「僕に目をつけたのは正しかった。だけど、連絡したのは間違いだ。僕ほど色々なことを知っている人間はいないからね。だから、今日のことは忘れたほうがいい」

笑みを浮かべる涼夜。しかしその笑い方は、どこか寂しげだ。「日常に戻るんだ。君はいま、入ってはいけない領域に入ろうとしている。これまで誰もが不可侵でいたところに、様々な人間の思惑が絡んだ結果、少しずつ、外界からの干渉が生まれつつある。その結果が、君のところへやって来た例の二人組だ。でも気にすることはない。君さえ何もわかっていなければ、巻き込まれることなく済む」

「桐江君。私、あなたが何言ってるのか、全然わからない」

「タチの悪いことに、君は全くの無関係ではない。この一連の出来事は、君がいるからこそなんだ。だから否が応でも外界からの干渉は今後ますます激しくなってくるだろうし、君も耐え切れなくなるかもしれない。それでも」

涼夜はベンチから立ち上がった。

「我関せずを貫くしかない。それが君にとって最良の選択肢だ」  
そう言い残すと、蓮実が止める間もなく、涼夜は公園を出ていってしまった。

残された蓮実はいくらの言葉の意味を読み取ろうとする。  
だが、いくら考えても、涼夜の言わんとしていたことがわからない。

唯一理解出来たのは、「自分や夕華に関わるな」という警告を遠回しに言っていたのだ、ということだ。

暑さが戻ってきた。

額から汗がどつと噴き出してくる。ハンカチで拭いながら、涼夜の消えていった方を、いつまでも見つめていた。

※ ※ ※

次の日。

講義が終わった後も、蓮実はしばらく浮かない顔をして、席に座り続けていた。

「おう、長峯。レジュメはどうした」

水沢教授が声をかけてくる。

蓮実はバッグの中からレジュメを出し、黙って提出した。

「この短期間によくまとめたな。今日のうちに読んでおきたいから、俺の部屋まで付き合ってくれ」

ゼミ室を出て、廊下を進んですぐの所にある教授室へと行く。

水沢教授は入り口の表示板を「在室」に変えてから、先に蓮実を中に通して、ドアを閉めた。

部屋に入るなり、足元に置いてあるダンボール箱に蹴躓いた。

「おお、気を付けろ」

と言いつつ、水沢教授は床に散乱している雑誌の束やダンボール箱を避けて、奥のデスクまで向かっていく。あまりの室内の様子に、しばし蓮実は硬直していた。本棚に入りきらない量の研究書が、床やデスクにまではみ出している。

「さて」

水沢教授は椅子にドツカと腰かけると、蓮実のレジューメを読み始めた。十分ほどで全部読み終わり、それから無精ヒゲをガリガリと搔く。どこか物足りなさそうな表情だ。

「今回は時間もなかったから、これでひとまず受領するが……」  
「どこか間違ってますか？」

「基本は十分だと思う。けどな、細かいところが足りていない」

「例えば？」

「谷を表す言葉に“ヤツ”があるな。夜刀神は、“ヤツ”の神だから、ヤトノカミと呼ばれている。では、我々にあまり馴染みのない“ヤツ”とはこういった言語かというと、これはいま現在の日本語よりも、アイヌ語に近い系統のものとなる」

考えてもいなかった。言語学の観点からのアプローチまで思い至らなかつたので、純粹に新鮮な意見として、蓮実は教授の言葉に耳を傾ける。

「また、アイヌ民族は、かつて蝦夷えぞと呼ばれていた時代もある」  
「そうですね」

「蝦夷はまた“エミシ”とも読む。朝廷に追われた日本の先住民族達の蔑称だ。北に追いやられた先住民族、その祖先のひとつが、あるいは夜刀神の一族なのかもしれない」

「一族？」

「お前だって、レジュメに書いてるじゃないか。信仰の変遷、と。蛇神信仰があったということは、それを信じていた何らかの集団があったと考えるのが自然だろ」

「つまり、夜刀神を信じていた人々がいたということですか？」  
「むしろお前のお——」

資料を探しながら、何かを言いかけたところで、不意に教授は口を閉ざした。微かに目が泳いだ。

「——お前のほうが、地元なんだから、夜刀神伝承については詳しいんじゃないか」

「あいにく昔話程度のことしか教えてもらっていませんので」  
「そうか」

教授はデスク上の資料の山の中から一冊のファイルを取り出し、蓮実に渡した。



中には手書きのメモを始め、文献のコピーやレジュメ等、様々な形態の紙が綴じられている。その全てに共通するのが、古代民族に関することだ。

「神話、民間伝承、それらの物語の中には一片の真実が含まれていることもあるし、時には真実そのものが姿を変えて語られているものもある。例えば、中国の蚩尤しゅう伝説にしても、そこから過去にあったであろう戦の様子を垣間見ることが出来る。アーサー王伝説からはブリティッシュの神々の衰退とキリスト教の隆盛の歴史を読み解くことが出来る。全ての物語に、時代時代の色が反映されている」

「あるいは夜刀神とは、古代民族そのものを暗喩したものと考へてもよいのでしょうか」

「ま、それも面白い考え方だと思う。信仰の対象ではなく、むしろ実在した先住民族そのものを表したのが、夜刀神だと」

「先生は、先住民族と言っていますけど、この日本に元々別の系統の民族が住んでいた、ということなのですか？」

「なんだ、いまさら。当たり前のことだろ。俺の講義を真面目に聞いていなかったな」

教授は呆れ顔を見せる。

「日本人が単一民族なんて馬鹿みたいなこと考えるのはやめてくれよ。俺達はむしろ、長い歴史から見れば、侵略者の立場なんだよ」

「侵略者……ですか」

いい響きではない。

「言語体系を見ても、西と関東では地名の付け方が違うし、これが東北以北となればもっと変わってくる。その一事をもっとしても、わかることだ」

「どこからやってきたんですか？」

「主には中国大陸から。有名なのは徐福伝説だ」

「あの仙人の？」

「仙人なんて呼び方はもっと後の時代に確立されたものだから、それこそ当時は仙人も何もないんだが、まあ、そういうことだ。三国志でも呉の孫権が東方へ船を出しているが、失敗に終わっている。古来から、中国は日本列島に興味を抱いていたんだよ」

「そういった一団が日本に辿り着き、どんどん侵攻した……」

「いや、すまん。誤解を招いたな。そんな新しい時代の話じゃない。もっと古代だ。乱暴な分け方をする、遙か昔に大陸から渡ってきたのを第一次渡来人とするなら、その後歴史に出てくるような渡来人達は第二次渡来人。俺が言いたかったのは、第一次の渡来人のことだ」

「では、先住民とはなんなんですか。彼らもその第一次渡来人ではないのですか」

「先住民もまた、外部からの渡来は渡来だが、ルートが違う。

彼らは南洋系、東南アジア経由で渡ってきたと考えられる」

「私達は、その先住民を追い出した、侵略者達……ということですか。追い出された彼らは、北へと行き、アイヌとなった？」

「そこは簡単な話じゃないさ。逃げた連中がアイヌになったというよりも、色々と血統が混ざって一族としての独自性が保たれなくなった、というのが本当のところかもしれない」

「……私のレジュメには、いま話したようなことは、まるで入っていないですね」

「まあ、それを入れたからって出来が良くなるわけじゃない。宗教学や民俗学的見地だけでまとめてしまうと、下手したら文学の世界に入ってしまう。頭だけで考えるな。フィールドワークをしてみろ。現場百遍は研究の世界でも同じだ」

「勉強しておきます」

頭を下げて、蓮実は退室した。

研究棟を出てから、なんとなく涼夜に電話をかけてみた。しかし、繋がることはなかった。

※ ※ ※

土曜日の午前の講義が終わった後、蓮実はいつもの精神科へと寄った。定期の診察日ではなかったが、どうしても会って話したくて、なんとか空いている時間に面談を入れてもらった。「話したいこと、というの？」

医師の御笠はにこやかな笑みを浮かべている。自然光だけの薄明るい室内のため、その表情から読み取れるものは少ない。蓮実はこれまで御笠の笑顔にそれなりに好感を持っていたが、涼夜と再会してからは、まるで印象が変わってしまった。

どこか薄っぺらい。

優しい顔をしておきながら、時には厳しく叱ることもできる涼夜。それに対して、御笠は常に飄々としてゐるが、振り返ってみれば真剣な態度を見せたことは一度もない。

本当にこの人を信用していてもいいのだろうか。迷いを感じつつも、発作を起こすようになってからずっと、自分のことを診てきてくれたのはこの御笠だから、頼るほかはない。

「私、茨城に行ってみようと思います」

「故郷、に？」

御笠は片眉だけを吊り上げた。椅子に座り直し、背筋を伸ばして蓮実と向かい合う。

「これまでだって帰ってたんじゃないの？」

「いいえ。昔のことを考えただけで気分が悪くなってきましたから。戻ろうなんて気持ちは全然なかったんです」

「それがまたどういう風の吹き回しで？」

「夜刀神です」

「ヤトノカミ？」

自分がいま研究していることを掻い摘んで説明する。そして、夜刀神の話を父が語ってくれていたような気がすることも、御笠に全て話した。

「普通だったら無関係だと思ったでしょう。でも、夢に見た父の姿、そしてそこから思い出した夜刀神のこと、そういったことを全て振り返ると、なんだか私が記憶を失っていることの答えがそこにあるような気がするのではないのです」

「さて、どうだろう？　それほど重要ではないと思うけどな」  
「それだけじゃないんです」

ここから先の話をすべきかどうか、ためらう。御笠に話したところで意味はない。

だけど、自分の決心を後押ししてもらうためには、全てを明かしておく必要がある。そうでないと、この先生はきつと納得しない。

「先日、警察を名乗る二人組がやってきました」

「……なんだって？」

御笠は眉をひそめた。

「一人は怖い顔した老人で、もう一人は女性でした。私の小学校の頃の友人が失踪したので、訪ねてきたんです。でも、警察らしくない雰囲気で、質問というよりは、尋問、といった感じでした」

「警察手帳は見せなかったの？」

「見ました。でも、私にはそれが本物か偽物かなんてわかりません。とにかく最初から私は何かを疑われていました。そして、去り際に聞かれたことが……」



「聞かれたことが？」

「私の研究テーマについて。つまり、夜刀神のこと。その課題を誰が決めたのか、ということだったんです」

御笠は黙っている。口に手を当てて、何度も首を捻る。

「で、君はどう答えたんだい」

「テーマを決めたのは教授です。でも、なんとなく正直に答えるのがいやな気がして、私は『自分で決めた』と返しました」  
「なるほど」

しばらくの沈黙の後、御笠はぽつりと呟いた。

「やはり茨城に帰るのはやめたほうがいいんじゃないか」

「どうしてですか」

「もしも一気に記憶が戻ることになったら、君が耐え切れなくなる。それに、その自称警察とやらも気になる。なんとも不穏な感じじゃないか」

自称警察については、涼夜がよく知っているようだった。その話もしようかと思ったが、今回は故郷へ帰ることについて医師の後押しが欲しいから来ただけであって、余計な情報を流す必要もないと判断した。それに、あの話をすれば、ますます御笠は反対するに違いない。

「私は大丈夫です。目を背けたくなるようなことがあったとしても、受け止めます」

「受け止め切れないから、記憶をなくしているんじゃないのか」  
「今度は、受け止めます」

しばしお互いに睨み合うような形になる。やがて御笠は溜め息をついた。

「仕方がない。あまり気は乗らないけど、本人が希望しているんだ。私の役目は君の治療であって、君の行動を縛ることではないからね。好きにするといいさ」

「ありがとうございます」

「ただし、無理はしない。少しでも違和感を感じたら、深入りせず、東京に帰ること。この病院に電話してくれても構わない。自分の心は自分で守る、いいね？」

「はい」

ひとまずは医師の許可が下りたことに内心胸を撫で下ろしながら、蓮実は頭を下げた。

※ ※ ※

叔父の家へ行くのは久しぶりだった。

大学に入り、幹旋してもらったマンションで何不自由なく暮らしているうちに、すっかり叔父やおばとは縁遠くなってしまった。

時々には電話で近況報告をしていた。それでも直接会うことは半年に一回くらいだった。高校卒業まで我が子のように育ててくれ、大学の学費はおろか高いマンション代まで払ってくれた叔父に対して、不義理と言えるほど疎遠になってしまっているのは、ひとつには自分の過去のことがあるからかもしれない。

叔父は、父の弟だ。

当然、過去に何があったか、よく知っている。知っているからこそ、蓮実には何も教えようとしない。当時の新聞やニュース映像を見せないように配慮しているし、連想させるようなことも話さない。

自然と、叔父はよそよそしい態度を取っていたし、蓮実もまた何か聞かされるのが怖くて、意識して距離を置いていた。

だが、今度こそ、正面から向き合いたい。そのために、用賀にある叔父の家へと向かった。

夕暮れ時、まだ蟬の鳴き声が響き渡っている住宅街を、土産のスイカ片手に歩いていく。叔父の家の前に着くと、ちょうど当人が庭先で植木の剪定をしているところだった。

「叔父さん、ただいま」

中学から高校まで育った家なので、気兼ねなく中に入る。

叔父は顔を上げた。短髪の厳しい風貌をしていて、パツと見は堅気の人間には見えない。タンクトップのシャツからはみ出ている上腕は筋肉で盛り上がっている。汗が夕焼けで輝く。蓮実に対して、ニコリともせず頭を下げた。

「蓮実ちゃん、いらっしやい」

おばさんが庭に通じる窓を開けて、中から出てきた。もう四十代後半のはずだが、肌の艶は一回りも二回りも若々しい。中学生の時から歳を取っていないように見える。垂れ目に泣きボクロが柔和な印象を与える。無骨な叔父とは対照的な見た目だ。

「外、暑いから、入ったら？」

おばに促されて、家の中に入る。大手建設会社の代表取締役を務めている叔父は、昨年からの復興需要もあってか、羽振りがいい。家も去年の夏に建て直したばかりで、真新しいクリーム色の壁が彩り鮮やかに見える。

クーラーの効いたリビングルームに入ると、荷物を床に置き、ソファに座った。すぐにおばがアイステイヤーを出してくる。グラスを受け取った蓮実は、かわりにスイカを渡した。

「ありがとう。これ冷やしておくわね。夕ご飯の後にみんなで食べましょ」

おばはスイカをキッチンに持っていくと、野菜庫にしまった。それからクルリと振り返る。茶に染めた長髪がふわりと舞った。

「蓮実ちゃんがうちに帰ってくるの、ほんと久しぶり。年末年始が最後じゃなかった？」

「そう。ご無沙汰しててごめんなさい」

「いいのよ、気にしなくて。大学生だもの、家に居着くより好き勝手なことやって青春を楽しんでくれるほうがよっぽど嬉しいわ。カレシとかいないの？」

またその話か、と蓮実は眉をひそめた。

「ううん、いない」

「自分から動かないと恋人なんて出来ないわよ。蓮実ちゃんのことだから、付き合うイコール結婚とか考えているんでしょ」

「それがあるべき姿だと思うけど」

「やだあ、カタい」

おばはコロコロと弾けるように笑った。

「いまどきの草食系男子が聞いたら喜びそうな言葉ね。いい心がけだと思うけど、少しは柔軟に対応しないと。好きな人もいないの？」

好きな人、と言われて、咄嗟に涼夜の顔を思い浮かべた。だけれど地味で暗い自分の恋人として涼夜が隣に立っている姿が想像出来ず、虚しい気持ちだけが募ってきたので、考えるのをやめた。

次に水沢教授をなんとなく思い出した。好きなタイプでもなんでもないが、話はしやすい。少なくとも嫌いではない。けれど二回り以上歳が離れているのだけは受け付けられない。

最後に御笠について考えてみたが、涼夜の劣化版のような印象が強くなっていることもあり、ただ顔が二枚目なだけだと思っ  
って候補から切り捨てた。

「いない」

あれこれ考えた末に、結局我ながらつまらないと感じるような答えを返してしまった。

「ふうん、そう」



おばはニヤニヤ笑っている。昔から勘の鋭いところがある彼女は、人の心をたやすく見透かしてくる。いまもまた、思考を読まれているのかもしれない。

そこへ叔父が戻ってきた。外は陽が落ち始めている。

「お疲れ様」

「……今日は終わりだ」

ボソリと呟き、叔父はキッチンから一升瓶を持ってくると、リビングまで持ってきた。

「富山の業者から送られてきた、酒だ。飲むか」

無愛想に日本酒の瓶を突きつけてくる叔父。蓮実の過去のことがあるにせよ、生来人付き合いが苦手なのであろう、この物言い。それでいて大会社のトップを務められる才覚。

蓮実は、叔父を、なんだかんだで愛しく思っている。

「うん、飲む」

フツと微笑んだ。

夕食が終わってから、蓮実と叔父はリビングの向かい合わせのソファに座り、日本酒を酌み交わしていた。

「強いな」

やや顔を赤くしている叔父は、まったく顔色が変わっていない蓮実のお猪口に向かつて、一升瓶を傾けた。その様子を見ていたおばが、「移し変えるのに」と言いながら一升瓶を横から取り上げ、キッチンで徳利に酒を入れ直す。

叔父は自分の妻の後ろ姿を目を細めて見つめていたが、顔をそちらのほうへ向けたまま、唐突に口を開いた。

「行くのか、玉造へ」

蓮実はびくんと体を震わせる。まだその話はしていない。いつ切り出すかとタイミングを見計らっているところだった。

「凶星か」

「どうして、わかったの」

「いつから親代わりをしていると思う」

酒をクイツとひと息にあおり、叔父は鼻を鳴らした。

「電話越しの声色ですぐに悟った。とうとう来たか、と」

「叔父さん、私は――」

「何も言うな」

きつと反対するであろう叔父を説得しようと、自分の気持ち  
を述べようとした蓮実だったが、先に叔父のひと言で言葉を封  
じられてしまった。

「言うな。認めん。あそこへ行くことは許さん」

これまで遠回しに蓮実を過去のことから遠ざけていた叔父だ  
ったが、ここに来て、物言いが直接的になった。生まれ故郷へ  
行くことは許さない――そんな風にはつきりと言われるのは今  
回が初めてだ。

「聞いて。前から私は夢を見てるって、話してたよね。お父さんとお母さんの夢。それが、ついこの間見たのが――」

そこまで言いかけたところで、急に胸からせり上がってくるものを感じ、慌てて蓮実は口を押さえた。胸を焼き焦がすような吐き気に襲われ、なんとか耐えようとして、苦しみのあまり咳き込んでしまう。

叔父は冷ややかな目を向けている。

「何を見た？ 記憶の片鱗か？ それを俺に説明できるか？ できまい、その調子では。それは結局、お前が過去のことを思い出したくないからだ。違うか」

違わない、と蓮実は思う。心の奥底では真相を知ることを拒絶している。だけど、本心がどうであろうと、無意識下に何が眠っているように、本当のことを知りたいと思う気持ちに嘘偽りはない。肉体を超える、想いがある。

「教えて、叔父さん」

こみ上げる吐き気を、膝頭を強く握ることで必死で押さえ込みながら、蓮実は真正面から見据えた。

「お父さんは、お母さんに……殺されたの？」

叔父は両目を見開いた。おばもキツチンで徳利を持ったまま固まっている。

言ってしまうえば楽だった。しかし今度は、叔父の反応を待っている間、恐怖で体が音を立てて震え始めた。

もしも真実が単純であれば問題はない。でも、万が一、そんな簡単な話ではなかったら？ 母が父を刺し殺したという、それ以外に説明のつきようがない夢の中の光景が、本当は別の意味を持つものだったとしたら？

叔父の沈黙しているわずかな数秒が、蓮実にとっては何時間にも渡って拷問を受けているような苦痛に感じられた。

「叔父さん……教えて」

哀願する。

叔父は腕組みして黙っていたが、やがてかぶりを振った。

「それがわかってどうする」

「どうする？　するとか、しないとかじゃなくて、私は自分の過去が知りたい。自分のことが知りたい。自分のルーツを実感したい。そのことだけ。だから、真実を知ったからって、警察に行くとか、そういうアクションを起こすつもりはないの」

「違う。俺が言いたいのは」

「ねえ、あなた」

横からおばが割り込んできた。

「玉造町に行くだけでしょ。だったら気にすることはないんじゃない？　その程度だったら危険なことは何も」

「お前が判断することじゃない」

苦い顔で叔父は一蹴する。

「蓮実は、思い出し始めている。そしていつか知る。なぜ父親が殺されたのかを」

「殺……された」

容易に予想は出来ていたが、改めて叔父の口から聞かされると、蓮実は衝撃で言葉を失ってしまった。

つまり、あの夢は、母が父を刺し殺したという、過去の事実に基づいたものであることに他ならない。

ということは……母は、いま、どうしている？ 両親ともに亡くなったと聞いたが、殺した側の母まで死んだというのか？  
それが本当なら、どうして。

「全てがわかる時、それは蓮実の人生が終わる時でもある。俺は、娘のように育てた姪が、そのような目に遭うのを見るのは忍びない。だから——あの町へ、行かせるわけにはいかない」

断固として揺るがない叔父の態度に、蓮実はこれ以上話をしても無駄だと悟った。説得するためのあらゆる言葉を考えてみたが、相手の表情を見ていて、やはり厳しいなと溜め息をつく。

「わかった」

ソファから立ち上がる。

「私、もう何も知らないほうがいいのかもね」

本心からの言葉ではない。それは叔父も察しているのか、返事はせず、ただ険しい目で見つめてきただけだった。

リビングから出る前に、蓮実は振り返った。

「ひとつだけ教えて」

「答えられることならな」

叔父は腕組みして、仏頂面で返した。

「お父さんはお母さんに殺された。そのことは、昔のニュースを調べれば、すぐにわかることなの？」



「いや」

すぐに叔父は首を横に振った。

「話題にはならなかった。ネットでも、昔の新聞でも、調べてみればよくわかるはずだ。どこも取り上げてはいなかった」

「だったら、どうして叔父さんは昔のニュースを私に見せないよう気を付けていたの？」

「俺が見落としていることもあるかもしれないからだ。もっとも、どこかが仮に事件のことに言及していたとしても、事実以上の上のことは何も書かれなかったかもしれない」

事実以上のこと、という物言いに、裏に隠されたものを感じ取ったが、蓮実はさらに聞くのを断念した。叔父は、どうせ話さないだろう。

「わかった。ありがとう。おやすみ」

素っ気なく言って、リビングを出た。

※ ※ ※

夢を見た。

蓮実は谷間の水田に立っている。空の群青色が目の奥に染み込んできそうで、息を吸い込むと、澄んだ空気が肺の奥まで満たされてくる。田んぼの稲の上をバッタのような虫がジジジと羽音を鳴らしながら飛び交っている。

（ここは……？）

いつもの夢と違うと、夢の中でありながら、実感できた。

脛まで泥水に浸かりながら田んぼのど真ん中に仁王立ちしている自分の左右に、背後から水をザブザブと鳴らしながら歩いてきた一団が、鮮やかに直線を描いて整列をした。

「我が君、ご命令を」

髭面の男が脇に立ち、野太い声で指示を求めてきた。金色の首飾りをぶら下げ、上半身裸で、幾何学的文様を刺青として肌に彫っている。手には何の精錬もされてなさそうな無骨な直刀が握られている。

「命令？」

蓮実の問いに、男はまっすぐ前を見据えたまま、スツと手を上げ、谷の入り口のほうを指で示した。

仮面の者が水田を突き進んでくる。

赤色をベースとした面には、黒色で隈取のようなものが描かれている。京劇の面にも見えるが、それと比べて、デザインはかなりシンプルだ。

「マタチの者です」

「マタチ？」

どこかで聞いたことがある。

「油断召されぬよう。奴はすでに我らの同胞を、たった一人で、五人も——」

男は最後まで言えなかった。

額に矢が突き刺さる。のけ反って吹き飛んだ男は、頭から水田の中に沈んだ。

悲鳴を上げる間もない。半弓を構えている仮面の者マタチは、次の矢をつがえて、蓮実へと狙いを定めた。

矢が空を裂いて飛来する。

当たる——と思った瞬間、色白の青年が横から飛び出して、蓮実の前に立ち塞がった。身代わりになって命を落とす気だ。

「やめて！」

蓮実は叫んだ。

が、青年は腰を落とすと、腕を素早く振った。飛んできた矢を、真正面から掴む。さらに続けて飛んできた矢も、空いてい

る反対の手で見事に掴んだ。

「ご安心を。我が君には指一本触れさせません」

そう言つて、にっこり微笑みながら振り向いたその顔は――

※ ※ ※

「桐江君!」

蓮実は跳ね起きた。

汗を掻いている。いつもと同じで気持ちのいい汗ではないが、今回はさらに毛色の違うものだ。冷や汗、というよりも、信じられないほどのエネルギーを消費して流した汗のような感じで。

あれはただの夢ではない。記憶の奥底を洗い出すことに留まらず、もっと深いところまで呼び起こされていた。かなりの負荷が自分の体にかかっていた。

時刻は朝六時。枕元の携帯電話を取り、アドレス帳から涼夜の番号を探した。

夜刀神伝説の舞台となっている玉造町<sup>たまつくりまち</sup>は、いまは行方市<sup>なめがた</sup>の一部となっている。かつては電車で行けたが、ローカル線が廃線となってからは車しか交通手段がない。

本来なら叔父の車を借りたいところだったが、それは不可能となったので、仕方なくレンタカーを借りることにした。

新宿駅近くのショップでセダンタイプの普通乗用車を借りて、一度大通りに出た後、路肩に停めて携帯電話をチェックした。やはり、涼夜からの折り返しはない。

彼は何かを知っていた。自分の過去に関わることも全てわかっていくような、そんな雰囲気があった。

それに、叔父と、同じようなことを言っていた。

これ以上深入りするな、ということ。

携帯電話を助手席に放ると、蓮実はサイドブレーキを下ろし、アクセルを踏み込んだ。

（ごめん、叔父さん）

でも一度覚悟を決めた以上は、真実を知らずにはいられなかった。

## 第二章 開戦

常磐自動車道を使って二時間ほどで目的地に着いた。時計を見るとちょうど正午だった。

霞ヶ浦が見えてきた。どこか鈍く光っている水面を眺めていても、特に何の感慨も湧いてこない。生まれ故郷へ戻ってきたというのに。

兩岸の狭まっている所を橋で渡る。対岸は見えるが、それでも大河川並みの距離はある。橋を渡り切ると、殺風景で寂れた田舎町の中へと入っていった。静かでただっ広い。橋を渡ってすぐ左手に塔が見える。事前に調べていたから、それが霞ヶ浦ふれあいランドの塔であるとわかった。

国道354号線をまっすぐ進んでいくと、国道183号線と交差する場所にぶつかった。



右に曲がれば、夜刀神が祭られている愛宕神社へのルートへ  
と行き着く。今回のことと無関係とも思えず、一応は所在地を  
調べていたが、いまはまだ行く気はしなかった。左へ曲がり、  
本来の目的地へと向かう。

国道を進んでいくと、自分が通っていた小学校の近くに着い  
た。空き地に停車し、外に出る。風の吹き抜ける音と、どこか  
遠くで車が走っている音。蝉がやかましく鳴いている。日差し  
はきついが、風のおかげでいくらか耐えられる。

小学校の目の前にあるパン屋で昼飯を買う。店の前でパック  
牛乳とカレーパンを袋から出し、食事を取り始めた。

いくつか思い出は甦ってきた。たとえば、昔からあるこのパ  
ン屋で、涼夜や夕華と一緒にパンを買った記憶はある。雨の日、  
傘を忘れて困っていたら、ちょうどパン屋から出てきた夕華が  
快く相合傘してくれたことも憶えている。

だけど、両親とのことはまるで頭の中に浮かんでこない。

せめて叔父から昔の住所を聞き出せば、かつての家の近くまで行けたのに、それも難しい。どういうルートで学校と家の間を往復していたのかすらも、すっかり忘れてしまった。

パンを食べ終わってから、勢いで茨城まで来てしまったがこれ以上することがない、ということ気が付き、困り果ててしまった。このままでは無駄足となりかねない。

まだ日は高い。焦らず、そう広くもない町だから、しばらく散策するのもありかもしれないと蓮実は気持ちを入れ替えた。

車を再び発進させると、小学校脇の道に入って、地元の中学校がある高台へと上っていく。自分は結局通うことのなかった中学校だが、涼夜や夕華は通学していた。どんな場所なのか、一度見てみたかった。

坂を上っていく途中で校舎やグラウンドが見えてきた。

国道354号線とぶつかる所で、車から降りた。しばらく近辺を徒歩で散策してみる。

国道を進んでいくと、目の前に平野の風景が広がった。このまま歩いていけば先ほど渡った霞ヶ浦の橋に出る。霞ヶ浦ふれあいランドの塔が見えるので、方角的にはわかりやすい。

こうして広々とした風景を眺めていると、ちよつとした施設と民家の他には、本当に何もない。その何もない風景は、一応は生まれ育った町だからか、心を落ち着かせる。

本当にこの町で、母が父を刺し殺したという事件が起きていたのかと信じられないくらい、平和な空気が流れていた。

引き返して、停めてあった車に乗り、国道を走る。183号線にぶつかったところで、さっきは曲がらなかった方向へとハンドルを切った。しばらく走ったところで、ブレーキを踏み、ウィンドウを開け、道路工事中の作業員に道を尋ねた。

「すみません、この近くに老人ホームがありますよね。どちらへ行けばいいんですか」

夜刀神の祀られている神社は、谷間の奥にある老人ホームの側にあると、インタ―ネットでは書かれていた。

どんぐり眼のいかつい作業員は、ギョロリと蓮実を睨んだが、穏やかでまったりとした訛りで、

「あっちだ。道狭えから、氣い付けろ」

と指差して教えてくれた。

示された道は、田んぼの中へと通じていた。

「えっと……ありがとうございます」

若干戸惑いながら、蓮実はお礼を言い、ハンドルを切って本道から外れた。

田んぼに隣接した道を走ってゆく。いつしか谷間に入っていた。途中、何度か狭い道で、地元の対向車とすれ違った。

小山と小山に挟まれて、田んぼが奥までずっと伸びている。まさしく、谷。昨日の夢に出てきた風景と酷似している。ここで夜刀神伝説は生まれたのだろうか。

最奥まで行くと、老人ホームが現れた。ネットの情報では、裏手の山に、目指す神社はあるとのことだ。

車を邪魔にならない場所に停めて、歩いていくと、小さな池が現れた。池の中ほどに鳥居が立てられており、鳥居には「愛宕神社」と刻まれているが、ひと目見てそこがどのような場所であるか、蓮実には理解出来た。

「<sup>しい</sup>椎井の池……」

夜刀神が集まって、時の権力者の横暴に抵抗したとある、伝説の池。後世になって作られたものかもしれないが、それでもお話通りのものが存在しているとなると、なんだか心楽しくなってくる。

池の脇に、小山を上るための階段がある。だが池を挟んで反対側に、小さな像と、その台座に説明文らしきものが書かれているのが見える。池を回って、そちらまで行ってみる。

兜をかぶった戦士の像。それは、夜刀神を最初に撃退した箭括氏麻多智のものか、それともこの地から追い出した壬生連麻呂のものか。よく見れば書いてあるのかもしれないが、それよりも台座に書かれている説明文のほうへ目がいった。

『「常陸国風土記」の行方郡に關係する伝承は二つある。

一つは、継体期の箭括氏麻多智による新田開発で神の土地と人間の土地の境界を設け、この椎井池の上に今でも鎮座する「夜刀神」を祀ることになったものである。

二つめは、古代常陸茨城国造をつとめ行方郡を建てる際、功労のあった壬生連磨の大規模水田開発にちなむものである。孝

徳帝七世紀の中頃に、麿はこの谷に堤を築き、溜池を整備し、水田の拡張と溜池による水田経営を試みたと思われる。現在も玉造の谷奥に多くの溜池が残り、稲作農業に欠かせない存在となっている。

また、ここ泉集落のある台地には、当時の集落跡と推測される原遺跡がひろがり、行方台地の分水嶺を走る開拓道路は古代の駅路の名残と目され、この地の東に「曾尼駅家」跡の伝承地がある。』

蓮実はすでに常陸国風土記を読んでいるので、すんなりと内容が頭に入ってきたが、それがなくても、非常にわかりやすく書かれているな、と感じた。

住み慣れた土地から永久追放された夜刀神。彼らは、どれだけの無念を抱えてこの地を去っていったのであろうか。

遙か古代のことへと思いを馳せ、また昨晚見た夢のことを考えながら、池の反対側へと戻って、坂を上っていく。途中から階段になったので、やや駆け上がるように一段飛ばしで進んでいくと、すぐに高台の上の神社に到着した。愛宕神社だ。

木々のざわめきと鳥の鳴き声。のどこかであると同時に、息が詰まりそうな静けさも流れている。それこそ蛇でも草むらから這い出てきそうな雰囲気だ。

神社の裏手に回る。

心臓が跳ねた。

インターネットで調べたから知っていたが、本当にあるのを見て、微かに興奮を覚えた。

注連縄を巻かれた石碑がポツンと立っている。三方を金網で囲まれている、どこか物々しい佇まいだ。

その石碑の正面には、夜刀神、と書かれていた。



「やっぱり、ここ、なんだ……」

蓮実は溜め息とともに頷いた。

もちろん、本当にこの場所が伝説そのままの土地であるかどうかは、誰にもわからない。本来は違った土地の伝承かもしれない。それでも、この神社へ実際に足を運んだことには、大きな意味があると蓮実は考えていた。

何枚か写真を撮り、神社の様子をメモに取る。木々に囲まれた空間は、夏の晴れ空のもとでも清涼感を与えてくれ、かなり居心地のいい場所だ。一方で、何か魑魅魍魎の気配を感じさせるような不気味さもあり、どちらかといえば長居をしたいような場所ではなかった。だから、休憩も兼ねて五分ほど滞在して、もう見るべきものもなくなっただので、早々に退散することにした。

神社を出ようと、階段に足をかけた、その時だった。

「やはり来たな」

まさかいるはずのない人の声が聞こえ、体が硬直する。

声をかけた男は、背後から近付いてきて、蓮実の肩を掴むと、力任せに振り向かせた。

「叔父さん……」

いつからいたのか。

叔父は目を怒らせている。

「なぜ言う通りにしなかった。なぜここへ来た。お前がこの場所へ来るということが、非常にまずいんだ」

ガツシリと両肩を掴まれて、噛み付かれんばかりの距離で正面から怒られる。

「痛、い」

蓮実は涙目で訴えるが、叔父は力を緩めようとはしない。

「帰るぞ。一刻も早くここから離れるんだ」

そう言つて、叔父は肩から手を離した後、今度は腕を強引に引つ張つて階段を下り始めた。

自分の意思とは関係なく、無理やり足を運ばされているので、何度も石段を踏み外しそうになる。

「ちよ、つと。叔父さん」

蓮実は暑さと恐れで汗を流しながら、抗議の声を上げる。だが、叔父は耳を貸そうとしない。どこか焦っている様子も感じ取れる。

やつとのこと小山を下りて、ホツとひと息つく。ようやく叔父はいささか乱暴な行動であつたと反省したのか、腕を引つ張るのをやめて、蓮実が息を整えるのを待っていた。

「どうしたの、叔父さん。急にこんな所へ来て、いきなり『帰るぞ』なんて――」

まるで。

何かから逃れようとしているかのような。

「……蓮実」

叔父は横にある椎井の池をチラリと見た。

「状況が変わった」

「何か、あったの？」

「ニュースは見えていないのか」

「ずっと散策してたから。車もラジオは聞かないし」

「そうか」

言葉少なく、叔父はただ頷いた。そこはかとなく顔色が悪い。

木々のざわめきと蟬の鳴き声が、鼓膜に、湿気とともに絡み付いてくる。静けさという名の圧力が、胸焼けを起こしそうな不快感を伴って、じわじわと迫ってくる。

沈黙に耐えられそうになくなった時、叔父は口を開いた。

「戦争が始まった」

「戦……争？」

「そうだ」

「どこで」

「この国で、だ」

顔が引きつる。この日本でおよそ聞くことのないと思われる言葉。どこかの国で戦争が始まった、というのなら変な話ではない。しかし、叔父は、他ならぬこの日本で、戦争が始まったと言っている。

「冗談」

「を言っている顔に見えるか？」

にこりともしない叔父の顔を見て、蓮実はかぶりを振った。

「そして、この戦争で真っ先に狙われるのは、お前だ」

狙われる、とはどういうことか。なぜ自分が狙われないといけないのか。そもそも誰と誰が戦争をしようとしているのか。

「わからない。叔父さんの話、全然わからない」

母が父を殺している夢を見るようになった。

警察を名乗る謎の二人組が現れ、夕華の居場所を問われ、その件については涼夜には深入りするなと警告を受けた。

そして叔父からは玉造町へ行くことを禁じられ、今度は、「戦争が始まった」などと理解不能な話を振られている。

蓮実の脳は事態を受け止めきれずに混乱している。

「もう一瞬たりとも油断は出来ない。一刻も早くこの場所を離れたほうがいい。詳しい説明は後です。とにかく車に乗れ」

叔父に促され、蓮実は自分の車へと歩いていく。叔父は、メートルほど離れた場所にワゴン車を停めている。運転席のドアに手をかけた叔父は、蓮実に声をかけた。

「先導は俺がする。遅れずについてくるんだ」

蓮実は頷き、自分も車に乗ろうと、ドアに手をかけた。

直後、視界が白光で包まれた。

熱風が全身に叩きつけられる。

風圧で身体が弾かれ、尻餅をついた。

音がぐぐもってよく聞こえない。耳の機能がおかしくなっている。

強い光のせいで、あたりが霞んで見えていたが、状況を把握出来るほどには徐々に回復してきた。

「え——？」

最初に口をついて出たのは、戸惑いの声だった。

叔父の車は大破し、辛うじて判別出来る程度に残ったボディから、黒煙と炎の柱が上がっている。戻ってきた聴力が、燃え盛る炎の音を捉えた。

道の脇に、千切れた肉体が四散している。後頭部をこちらに向けているのでわかりにくいだが、横倒しに転がっている頭部は、髪型から察するに、叔父のものだ。木の枝に赤黒い物が絡みつき、根元には腕や脚が捨てられている。

何もかもが唐突に——戦争の火蓋は切られた。

「叔父……さ……」

齒の根が合わない。

腰が砕けるとはこういう状態なのかと、早くこの場から離れないと焦っているのに、体が全く反応しない状態に、ますますパニックが激しくなってくる。

一方で、すぐに動けないことが、かえって自分の身を救ったのでは、と蓮実は考えた。車が爆発し、叔父はバラバラに吹き飛んで、死んだ。自分の車も同じように仕掛けが施されている可能性がある。



とにかく同じ所に留まっているわけにはいかなない。

腰をかがめて、低い姿勢で自分の車から離れる。無防備に全身を晒すことを恐れて、山のほうへと寄り、なるべく死角を無くす。かがんだ状態のまま、山肌に背中をもたれかけた。遮蔽物となりそうな草むらや林は、反対側、神社のある小山のほうにしかないが、そこへ行くには道を横断しなければならない。

首を横に向ける。叔父の車はまだ燃えている。千切れ飛んだ叔父の頭部も見える。地面に広がる血溜まりが、否応無しにこれが現実の光景であることを思い知らせる。

正面に向き直る。草むらまで走って二秒ほど。さらに進めば、小山の中へと逃げ込める。自分がいま寄っている山肌は崖のよう  
に急斜面で、とても登れない。

二秒。たった二秒で安全圏に入れる。だけど、その二秒は長過ぎる。

叔父は戦争が始まったと言っていた。冗談か比喩だと思っていた。だけど叔父の爆死した様は、まさしく戦争と呼ぶ以外に言い表せる言葉が見当たらない。

ほんのちよつと車から離れている間に、爆弾を仕掛けられた。下手人は、いまだ近くに潜んでいる可能性が高い。

山を背にしてから十秒ほど経過した。攻撃される気配はない。あるいは思い過ごしで、爆弾を仕掛けた犯人はどこかへ去っていったのか。

「なんだね、これは！」

誰かが叫んだ。叔父の車の近くからだ。見ると、腹の出た中年男性が、目を丸くして呆然と突っ立っている。頭にタオルを巻き、土で汚れた白いシャツにジーンズという格好からして、地元の農家の人だろう。爆発音を聞きつけて、寄ってきたに違いない。

中年男性は、蓮実に目を向けると、ハツとした顔になった。

「あ、あんた、大丈夫か!？」

声をかけ、近付こうとする。

銃声が響く。

中年男性の頭部が弾け、破れたタオルと血肉が、飛び散った。

頭の三分の一を失った男性は、自分が死んだことも理解する間もなかったであろう、ぎょろんと白目を剥き、力を失って、膝から崩れ落ちた。

「う……うう」

こみ上げる吐き気と嗚咽を、懸命に堪える。ただの農家の人  
が殺された。その一事をもつてしても、いま異常な事態に巻き  
込まれていることがわかる。

恐れから来る妄想ではなかった。考え過ぎということはない。  
ここは戦場だ。僅かな油断が命取りとなる。

当面の問題は、ここからどうやって逃げるか、だ。

いまだ狙い撃ちにされていないところを考慮に入れると、自分がいまいる位置は、ちょうど相手からは死角になっているらしい。でなければ、あの農家の人のようにすでに殺されているはずだ。となると、ここで待機しているのが最も安全、ということになる。

しかし、相手も移動をするに違いない。刻一刻と、セーフティゾーンは変化していく。誰かが助けに来るまで待ち続けるのも愚かな話だ。

深呼吸する。とにかくパニックを抑えないことには何も出来ない。

震える手でポケットから携帯電話を取り出す。自分の現在位置を調べれば、何か手立てを講じることが出来るかもしれない、と考えた。

電波強度のせい、動作が重い。なかなか地図が出てこない。もどかしい思いをしつつも、少しずつ画面に表示される衛星写真を凝視する。

やっと地図が出てきた。写真なので、地形までよくわかる。

叔父の車がある方へ行けば、元来た道へと戻れる。が、そこらは狙撃されてしまう。

一方で、谷のさらに奥へ行けば、T字路にぶつかる。そこから右へ曲がれば農地へ、左へ曲がれば市街地へ出られる。実際に見る限り、森に囲まれた鬱蒼とした道に入るようで、何が潜んでいるかわからない以上気は引けるものの、裏を返せば遮蔽物が多いということにもなるので、いざとなればなんとかなるかもしれない。と蓮実は踏んだ。

賭けだった。けれども、叔父の車の方向へ逃げるのは選択肢としてありえないから、必然的に道はひとつに絞られる。

唯一選ばなければいけないのは、T字路に辿り着いてからどちらへ逃げるか、ということだが、それも考えるまでもない。

右に曲がると長い森の道を通過しなければならぬ上に、森を抜け出ると田んぼが広がっている。いくらでも狙ってくださいと言っているようなものだ。

それに対して左の道は、右の道と比べて半分ほどの距離で森を抜け出ることが出来、さらに民家が密集している所へと出られる。もっと進めば国道もある。

呼吸を整え、覚悟を決める。

立ち上がる。膝が震えているが、なんとか足は動かそうだ。

「――！」

蓮実はグツと齒を噛み締め、地面を力いっぱい蹴り、走り始めた。

足が空回りする。

地面を変な風に蹴ったせいで、膝に負荷がかかり、筋肉と関節が悲鳴を上げる。

それでも十歩ほど走ったあたりから、ペースを掴み始めた。体全体が軽くなり、プレッシャーから僅かに解放される。

背後から狙撃されるのではないかと恐れながら駆けているうちに、気が付けば森の中のT字路に出ていた。

ほんの一瞬立ち止まり、すぐに左へと曲がる。一度決めたことだ、迷う必要はない。

（行ける！）

気が緩んだ、その瞬間。

銃声が鳴り、足元の土が弾け飛んだ。

胃が裏返しになって喉奥から飛び出そうになるほど、体の内奥から痛みを伴い、恐怖心がせり上がってくる。

咄嗟に、近くにある木の幹へと体を寄せた。

また銃声。耳元の木の皮が弾け飛ぶ。射線に入らないよう、さらに木の陰へと体をずらす。

やはり追われていた。

鼓動が激しい。心臓が何度も伸縮を繰り返しており、そのうち粉々に砕けそうだと。

頭を吹っ飛ばされた農家の人のことを思い出す。何もわからないまま死んでいった犠牲者。選択を間違えれば、自分もあんな風に死ぬ。

当然湧いてくる恐怖。誰もが抗えない疑問。死んだらどうなるのか。一発で頭を撃ち抜かれた途端、自分にどんな変化が起きるのか。闇の訪れ？　しかし闇を闇と知覚出来る意識は、自分に残されているのだろうか。

息が荒くなる。

ただひたすら怖い。



木の陰から出たら、間違ひなく殺されてしまう。その先は永遠に目覚めることがない。自分が何で狙われないといけなかったのか、その理由を知ることもなく、貴重なたった一度の人生を終わらせてしまうことになる。

「いや……」

涙がこぼれる。

体中から力が抜けてくる。

「やだ……やだっ！ 死にたくない！」

嗚咽を漏らす。そんなことをしても助かるわけがない。ここで待っていてもいつか殺されてしまう。それはよくわかっていゝる。でも、もう走る気力は出てこない。生きるか死ぬかの賭けをするよりも、一秒でも長く生き永らえられる道を選びたかった。

涼夜の顔を思い出す。

小学校の頃、あんなにも好きだった人と再会できた。でも、ここで死んでしまえば、もう二度とその幸せを味わうことは出来ない。

「助けて……」

へたり込み、膝を抱えて、ただガタガタと震える。

「誰か、助けてっ！」

来るはずもない助けを求めて、天に向かって泣き叫ぶ。

バイクの爆音が聞こえた。

T字路のほうからだ。

蓮実は目を見開く。

土を撒き散らし、慣性でドリフトをしながら、5000CCクラスの真紅のバイクが、蓮実の視界へと躍り出てきた。

赤いライダースーツに身を包んだ運転手が、背中のホルダーから、サブマシンガンを取り外した。銃口は、山のほうへと向けられる。連射音が森の中に響き渡る。

自分が撃たれるのではないかと身構えていた蓮実は、心臓に優しくない発砲音に悲鳴を上げ、両耳を手で押さえる。

赤いライダーによる連射が止まった。恐る恐る手を頭から外し、様子を窺うと、ライダーはバイクを進ませきて、そばで止まった。ヘルメットを外し、長い茶髪を宙にふわりと舞わせる。中から出てきた顔を見て、蓮実は叫んだ。

「夕華!？」

「後ろ、乗って」

飲み会の時には見られないような、真剣な表情の夕華に促されるも、これは何かの悪い冗談かと現実を受け入れられない蓮実は、ただ呆然と相手の顔を見ることしか出来ない。

「早く！ 相手が怯んでいるうちに！」

怒鳴られたことで、なんとか立ち上がることは出来た。

「ほら、しっかり！」

よろめきながらも、バイクのほうへと歩いていく。

後部シートにまたがり、夕華の腰に手を回した途端、バイクは急発進した。振り落とされないよう、蓮実は腕に力を入れて、しっかりとしがみつく。

森の中を高速で駆け抜けてゆき、あつという間にバイクは住宅地に飛び出した。同じように乗り物を使って追っ手が来ないかと、蓮実は後ろを振り返ってみたが、何も来る気配はない。

助かった、と実感したのは、国道に出て、夕華がアクセルを緩めた時だった。法定速度プラス十キロくらいのペースに落ち、前を走るワゴンの後ろについて、さっきまでの緊張感はどこへ行ったのかというくらい何食わぬ様子で道を走っていく。

心臓はいまだ激しく脈打っている。

問いたいことは山ほどあるが、気持ちが悪く落ち着かないので、なかなか口を開く気になれない。それは夕華もわかっているのか、ずっと無言でいる。

霞ヶ浦を越えて、橋を下りたところで、夕華はバイクを道の脇に停めた。蓮実は彼女の腰から手を離し、地面に足を着ける。途端に、膝が笑い、ガクンと体勢を崩した。

「無理ないよ。怖かったでしょ」

ヘルメットを取った夕華が、バイクにまたがったまま、顔を向けてくる。蓮実は全身の震えを実感しながら、黙って、頷いた。

「本当はあの時の飲み会で、話しておくべきだったかもしれない。でも、蓮実を巻き込みたくなかったから。ごめんね」

ごめんね、と言われても、そもそも現況を全く把握出来ない。誰にどんな責任があるというのか。まるでわからない。

「何が、どうなってるの」

辛うじて、それだけは問えた。

「逆に教えて。蓮実はどこまで知ってるの」

「知らない。何も」

「叔父さんから聞かされていなかったの？」

「全然」

「涼夜君は？ 彼は教えてくれたんでしょ」

「……どういふこと？」

夕華を睨む。叔父はともかく、涼夜が今回の件にどう関わっているというのか。

「本当に、教えられてないの？」

「嘘ついてどうするの」

少し苛立ってきた。

「いい加減にして。どうしてみんなハッキリと言ってくれないの？ 都合が悪いんだったら、ちゃんと理由を話せばいいじゃない。それなのに、隠し事ばかりで。だから——」

だから。

叔父は自分を連れ戻そうとやって来て、そして。

爆死した。

ゾッと怖気が走る。そう、これは単純な話ではない。生き死にかかってくる大変な問題。叔父の言ったことが本当なら、まさに戦争が起きている。自分がもしもその戦争において重要なポジション——命を狙われるほどの——にいるのだとしたら、軽々に事情を明かせないのではないだろうか。

頭が痛い。考えれば考えるほど、恐怖が増してくる。

「……お願い、教えて」

声を絞り出して問いかける。

「夕華が何してたのかとか……なんで私が命を狙われているのかとか……いっぱい聞きたいことはあるけど……」

顔を上げ、夕華を見据えた。

「教えて。これは、誰と、誰の、戦争なの？」

夕華は顔を背けた。風が吹き、長い茶髪がなびく。その後ろ姿を見つめたまま、蓮実は辛抱強く答えが返ってくるのを待った。

「戦争、っていうのはわかってるんだね」

「叔父さんが、最期に、言ってた」

「どちらにせよ、もう手遅れか……」

溜め息とともに夕華はかぶりを振った。

蓮実は一步近付く。



「早く。話して」

また沈黙が流れる。しばらくしてから、夕華は振り向いた。

「夜刀神」

ああ——と蓮実は納得した。

どこかで、その答えを予想していた自分がいた。

「蓮実には、いまさら説明する必要はないと思うけど」

と、夕華はライダースーツのジッパーを下ろし、鎖骨のあたりに彫られた三角形の刺青を見せてきた。朱色に染まった三角は、普通の者が見れば、そこにどんな意味があるのだろうかと首を傾げたことだろう。

蓮実は蛇神信仰について調べた時に、それが意味するところも学んでいたのだ、なるほどと思った。

古代の民は、蛇を表すのにしばしば三角形を用いた。それは刺青であつたり、土器であつたり、衣服の文様であつたり、あらゆるところに象徴として表れていた。

脱皮を繰り返す蛇は、不老不死の存在として崇められていた。その力を取り込みたいと願つた古代の民が、三角形という記号に簡略化して、擬似的に蛇を身にまもつていたのではないかと言われている。

つまり、夕華の鎖骨にある刺青は、蛇を表している。

「これは夜刀神の一族であることの証」

何を思つてか、夕華はフツと寂しげに微笑んだ。

「私とその血を受け継いでいると知つたのは、中学に入る前。蓮実……あなたが、あの事件を起こしたことがきっかけで、自分のルーツを教えられたの」

「あの、事件？」

「話すとは長くなるから、続きは東京に戻ってからね。ここもそろそろ追っ手がかかるかもしれないし。さあ、乗って」

促され、蓮実は後部シートに座った。

スロットルが回され、バイクにエンジンがかかる。

「あの日、女王はいなくなった」

「え？」

「自分の夫を刺し殺し、姿を消した。一人残った子どもは、その時の記憶を失い、叔父のもとへ預けられた。その子どもというのが――」

夕華はグッとハンドルを握る。

「あなたのこと」

「女王って、じゃあ、私のお母さん……？」

「そう。私達一族の女王。だから、あなたは、一族の姫。敵に狙われ、そして守らなければならぬ存在」

バイクは急発進した。蓮実は夕華の腰にしがみつく。猛スピードで国道を駆けてゆく中、たったいま聞かされたことの意味を理解しようと、頭の中を激しく回転させる。

（どうということ？ 夜刀神は、実在して、現代にもいて、その女王が私のお母さんで、私はその姫！ 叔父さんも、桐江君も、夜刀神の一族？ それに――）

これは戦争だと、叔父は言った。

誰と誰の戦争かと聞けば、夕華は、夜刀神の戦争だと答えた。では、その相手は？

夜刀神は、何と闘っているのだ？

※ ※ ※

夕華と友達になったのは、小学校に入ってすぐのことだった。

隣同士の席になり、自然と交流も多かったから、それほど時間を置かずに仲良くなった。とはいっても、蓮実は幼い頃から人見知りが激しかったので、自分から積極的に話しかけたことはない。いつも夕華のほうからおしゃべりをしてきた。

小学三年生の頃から、同学年での序列が定まってきた。その中でも蓮実は低い位置にいたが、夕華は人気者グループの仲間入りを果たしていた。

男子のほうでは涼夜がトップクラスの人気を誇っていた。

女子の夕華、男子の涼夜、といった形で双璧をなしていた記憶がある。

同じタイプとして、夕華が涼夜に興味を抱くのは、必然だったと言えるかもしれない。

「私、桐江君が好き」

そう打ち明けられた時、蓮実は何も感じなかった。

その時は涼夜に特別な感情は抱いておらず、注目はしていたが、むしろ苦手なタイプだと思っていた。

夕華は友人である自分に話したことで、より強く気持ちが悪くなったようだった。その後の熱烈なアプローチは、小学生らしく純粋で、どこか清々しくもあった。暇さえあれば涼夜のそばへ行き、一分一秒でも多く会話を楽しもうとしていた。

蓮実はまだ、その様子を見守っているだけだった。

そんな三人の関係が変化したのは、蓮実が記憶を失っている、夕華が言うところの「あの事件」を境目にしてのことである。

夕華は明るく振る舞っていたものの、たまに沈んだ表情を見せるようになった。涼夜は、そんな夕華を避けるようになり、ちよつとずつ蓮実へと接近するようになっていった。

そして小学六年の時。男子が「あの事件」のことでいじめてきたのを、涼夜が飛び込んで、助けてくれた。

あれ以来、蓮実は涼夜へと想いを寄せるようになっていった。だけど中学で蓮実は東京へと行き、地元に残った涼夜は同じ公立校に行った夕華と付き合うようになった。付き合っていた、という話は先日の飲み会まで知らなかったが、いまから思えば、中学高校で涼夜と接する機会がなかったのは、そのあたりの事情があつたからかもしれない。

きつと夕華は、涼夜を近付けたくなかったのだ。段々と距離を縮めていた、自分に。

（それだけじゃない。夕華は、私に、夜刀神のことも隠していた）

高速道路に入り、全身に風を受けて、吹き飛ばされないうようにしっかりと夕華の腰にしがみつきのながら、蓮実はひたすら考えていた。

いま、夕華は何を思っているのだろうか、と。

途中でパーキングエリアに寄った。

「奴らもTPOはわきまえているから、そう簡単には襲ってこないよ」

と夕華は言っていたが、その「奴ら」が何者かわかっていない蓮実には、レストランの中で、トイレに行った夕華がやって来るのを待っている間、気が気ではなかった。

近くのテーブルで馬鹿騒ぎしている少年達の声量に怯える。目の前の席でラーメンをすすっている禿げた中年男性が時折こちらを見るのが気になる。果ては子どもがそばを駆け回っていることとですら生きた心地がしない。

やっと夕華が姿を現した時、本気で抱きつきたいと思ったくらいだった。

「どーしたの？ 涙目になっちゃって」



のんびりした口調の夕華は、いつもの彼女らしさを取り戻している。先ほどまでのテキパキした様子が嘘みたいだ。その態度を見て、初めて、蓮実は自分が死線を脱したことを実感出来た。

ホッと安心すると同時に、空腹感が胃の奥からせり上がってきた。叔父の死を目の当たりにしたというのに、旺盛な食欲が湧いてきている事実には、自嘲気味に笑みを浮かべる。

親しい人が死んだ。親代わりの人だ。もともと体調に変化が起きるものだと思っていた。

それなのに、あろうことか。

こうして生き延びていることを、心の底から、喜んでいる。

（泣かないと）

いつしか安堵の笑みを浮かべていた蓮実は、表情筋を緊張させ、険しい顔を作り出すと、無理やりにでも涙を流そうとする。

そんな彼女が、テーブルの上に置いていた手に、夕華はそつと手の平を重ねてきた。

「いいって。時が来たら、泣くもんだから。いまは、それでいいって」

蓮実は夕華の顔を見る。優しい目だ。

つまりは、この時は、素直に生きていることを喜んでもいい、と慰められている。

今度は肩から力が抜け、ガクツとうなだれた。

「まだ何も頼んでないの？ お腹減ってるでしょ」

「うん……夕華が戻ってきてから、って……」

「いいよ、私が注文取ってくる。何が食べたい？」

「味噌ラーメン……」

目の前の中年男性が美味しそうに食べているのを見ると、自分も食べたくなってきた。

「わかった、ちよつと待ってて」

券売機へ向かった夕華は、ほどなくしてカウンターに食券を出し、番号札を持ってテーブルに戻ってきた。注文の品が出来るまで、数分かかる。

「そろそろ話しておくね」

夕華は周りに聞こえないよう、声のトーンを落として、話し始めた。

「長くなるから、要点だけかいつまんで説明すると、私達は夜刀神一族。古代日本で朝廷から住んでいる土地を追われた先住民族の末裔。細かいことは質問しないでね、ややこしいことがいっぱいあるから。まずは、ここまでは、理解出来る？」

「それは……」

頭は追いつかないが、早く話を進めてほしいので、ここは理解出来るということにしておく。蓮実はひとまず頷いた。

「そして、蓮実の叔父さんも、涼夜君も、実は同じ。色々と気にかけてくれていたでしょ。二人とも夜刀神一族——蓮実、あなたも、夜刀神の末裔なの」

「さっきの話だと、私は、一族の女王の娘……姫」

「権威だけじゃない。能力も引き継いでいると言われている。だから、奴らはあなたを狙う。だから、私達はあなたを守る」

「ごめん。その、能力って、何？」

「……やっぱり無意識だったのね」

夕華はポケットから新聞紙の切抜きを取り出した。

「これ。蓮実に見せようと思って、持ってきた」

心臓がドクンと跳ねる。

見出しを見ただけで、何の事件かすぐにわかった。

『茨城県玉造町で夫婦失踪』『現場には血痕』『残された子どもは記憶喪失』。

「叔父さんは、どの新聞やテレビでも報道されなかったって」

「それ、ガセネタで有名な三流新聞。どうせ載っていても大したことないだろうって、無視したんだと思うよ」

「おかしい、この記事。だって、私は、見てた」

母が父を刺し殺した光景を憶えている。その直後、母が包丁を振り上げて襲いかかってきたのも憶えている。正確には夢で見ただけだが、叔父もその事実を認めていた。だから、「失踪」はありえない。少なくとも父の死体は残っていないといけない。「何も無いのが、変だって？ 全然変じゃないわ。一族の幹部が会議の結果、当時下した判断は、満場一致でこうだったみたいだよ」

と、夕華は力の籠もった眼差しで、蓮実の目を見つめてきた。

「『姫が能力で消し飛ばしたに違いない』って」

「能力、って……？」

その時、夕華の携帯電話から着信音が流れ始めた。電話を取り、通話口を手で押さえながら、二言三言短いやり取りをする。それから電話を切り、ぺろっ、と舌を出した。

「幹部から怒られた。急いで戻ってこいって。ご飯早く食べよ」  
「う、ん。わかった……」

ちょうど注文の番号を呼ぶアナウンスが店内に流れ、夕華は二人分の食事を取りに行く。その後ろ姿を、蓮実は微かな違和感とともに、強張った表情で観察していた。

※ ※ ※

あれは小学六年生の時だった。

夏休みの宿題の読書感想文がまだ出来ていなかった夕華が、蓮実に助けを求めてきた。

すでに感想文を書き終えていた蓮実は、丸写ししない、という条件のもと、夕華に完成稿を貸してあげた。

結果、たしかに丸写しではなかったが。

夕華はあまりにも稚拙に蓮実の感想文を模倣していた。誰が見比べても、蓮実の文章を参考にしたとわかるものだった。

「長峯の宿題を写したんだろう！」

ホームルームの時間、教師の叱責を受けながら、夕華は懸命に「写してないです！」と否定していたが、目が泳いでいる様子から、他の生徒達は嘘をついているとわかっていた。

そこで、蓮実は助け舟を出した。

「浅井さんと私、一緒に相談して書きましたから、中身が似てるんです」

どう聞いても強引な理屈だった。当然、教師は「そういう余計なことは言わんでいい」と怒ったが、蓮実は動じなかった。

「本当です」

無表情に堂々と言い放つその様に、場の空気は少しずつ変化していた。教師に睨まれても、蓮実は目を逸らそうとしない。

教師は溜め息をつき、かぶりを振った。

「……まったく、浅井と違って、長峯は嘘をつくのが上手だな」  
「嘘じゃありません」

「わかったわかった。お前には負けた。けどなあ、浅井」  
と、苦笑を浮かべながら、教師は夕華を指差した。

「お前、嘘をつく時は、もっとわからないようにやれよ」

※ ※ ※

最初に違和感を感じたのは、話の内容だった。  
蓮実は、これが誰と誰の戦争かと尋ねた。



夕華は、夜刀神、と答えた。

なぜもう一方の勢力について話さなかったのか。なぜあえて夜刀神の名しか出さなかったのか。夜刀神と何が戦っているのか。どうして言わなかったのか。

次に違和感を感じたのは、霞ヶ浦を渡る前、国道でバイクのスピードを緩めたことだった。

なぜ、追撃が来ないとわかった？

霞ヶ浦を渡ってから、一度バイクを停めたのも、よく考えればおかしい。パーキングエリアでのんびり食事を取っているのも変だ。

そして、決定的な違和感。

パーキングエリアで、夕華の携帯電話から、着信音が流れてきた。

この状況で、なぜそんな無用心なことをしたのか。

いつ、その場が戦場になるかわからないのだ。着信音どころか、携帯電話の電源を切っていてもおかしくなくらいだ。それなのに、不自然なほどに、夕華はリラックスしている。

疑えばキリはない。でも、信じ切ることも出来ない。もしかしたら、夕華は……。

※ ※ ※

板橋で高速を下りてから、それほど時間を置かず、新大久保のマンションの前に着いた。

夕華は蓮実を降ろすと、辺りを警戒するように見回した。それからバイクを路肩に停め、無言で中へと入るよう促してくる。不穏なものを感じつつも、蓮実は歩を進めた。夕華がついてくる。

ひとつ目の自動ドアを抜けると、ガラス張りの自動ドアに遮られ、クリーム色のエントランスが向こうに広がっているのが見える。二つ目の自動ドア横にある機械にキーカードを入れないと、ロックは解除出来ず、中に入れない。

「……ねえ、ここ、私の家だけど」

「わかってる」

「どうしてこんなところに寄るの？ 早く仲間の所へ行かないの？」

「その前に取ってきてほしいものがあるの」

「何？」

「蓮実のお父さんの、手帳」

エントランスに入るため、マンションの玄関の機械にキーカードを差し込むところで、蓮実は振り返った。

「父さんの手帳？」

「ええ。詳しくは後で説明するから。早く玄関を開けて」  
急かされるが、なおも蓮実はキーカードを差そうとしない。  
高まる疑惑の念に駆られ、あることを聞かなければ、気が済ま  
なかった。

「ねえ、夕華。叔父さんも夜刀神の一族だったんだよね」

「そうだよ。ねえ、早くして」

「つまり、あなたの仲間だったわけでしょ」

「あのさあ、時間がないんだけど。それがどうかしたの」

「だったら、どうして——叔父さんを見殺しにしたの」

夕華の顔から一切の表情が消えた。言葉を発しようとしな

い。ポーカーフェイスを試みるだけ、成長したな、と蓮実は感じ  
た。だけど、感情を隠すのが相変わらず下手すぎる。少なくとも  
沈黙するべき場面ではない。ここは苦笑いしながら聞き返す  
か、怒るか、どっちかの態度を取るべきだ。

「変なこと、言わないでよ」

「根拠はある」

指を三本立て、夕華の眼前に突きつける。

そのうち、人差し指を折った。

「まずひとつ目。助けに来たタイミング。やけに早かったよね。それはなぜ？」

「近くで見守ってたからに決まってるじゃない」

「なんで私を見てたの？」

「さっきも言ったでしょ。蓮実は夜刀神一族の姫なの。だからこっそり後をつけてたの。それのどこがおかしいの」

「ううん、おかしくない。でも、だったら」

と、蓮実は夕華を睨んだ。

「私を見守っていたのなら、叔父さんの車に爆弾が仕掛けられる瞬間も見えていたはずだよね」

「……！」

夕華の目に動揺が走った。その瞬間、蓮実の疑惑は確信へと近付いた。

「だって、そうでしょ。叔父さんは神社の前まで普通に車を運転してきた。その後、私を迎えに行って、また車に乗ろうとした。その時、爆発した。つまり、あの場で爆弾仕掛けられた、ということになるんじゃないかしら。もしも夕華が私のことをずっと見ていたら、叔父さんの車が危ないということもわかっていたはずだよね」

「そんなの、リモコン爆弾だったら、どこで設置しても同じじゃない！ それに、私は蓮実が神社に行ったのを追いかけてたんだから、車のことなんて見てなかったよ！」

「二つ目」

夕華の弁解を無視して、蓮実は中指を折った。

「叔父さんはあなたのことを話していなかった。それはなぜ？」

「それは、だって、別行動を取ってたからだよ。蓮実の叔父さんが出発してから、私にも命令が出されて、あの人、あなたの叔父さんだけじゃ心配だからって、陰でサポートしろって」

「だったら一緒に私の後を追って神社に行ったりせず、叔父さんの車を監視してればよかったよね」

「だから、あの時はそこまで考えが」

「それに、命令されたって言ったけど、夜刀神の幹部から？」

「そうだけど」

「じゃあ、なんで、パーキングエリアで幹部から電話を受けた時——叔父さんが死んだことを報告しなかったわけ？」

サツと夕華の顔が青ざめる。もう観念して、と蓮実は言いたかった。昔からこの手の言い争いで、夕華が蓮実に勝ったためしがない。圧倒的に向こうの方が不利だ。

「そして三つ目」

残る薬指を折る。

「あなたはもっと大事なことを隠している」

「いい加減にしてよ！」

夕華が耐え切れずに怒鳴った。

「私がなんで隠し事をしないといけないわけ!? こんな大変な時に、友達を困らせようなんて、考えるわけじゃないじゃない!」  
「なら、ニュースになるような何かが起きたことを、教えてくれなかったのは、なぜ?」

沈黙が訪れた。

完全に困惑した顔つきで、夕華は目を泳がせている。

「どう……いう……こと……?」

「あなたは、私の過去の話をわざわざ持ち出したりして、直近のニュースに目を触れさせないようにしていた」



「そんなこと、私はしてない」

「うそ。叔父さんは言っていた。戦争が始まった、って。ニュースを見てないのか、とも言った。それだけの重大な事件が起こっているはずなのに、あなたは、何も話してくれなかった。それはなんで？」

「聞いて、蓮実。私は……」

「あなたの性格は、お見通し。要はこういうことでしょ。下手に質問されるとボロが出るから、あえて説明しないことに決めた。それは、自分が戦争に巻き込まれた側ではなくて、むしろ戦争を起こした側だから……上手にごまかす自信がなかったから、何も言わなかった。そういうことじゃなくて？」

夕華は口を閉ざした。双眸に暗い色を湛えている。胸中に溜まった何かが爆発する一歩手前の様子。その態度が、蓮実の指摘したことをすべからず肯定している。

エントランスに通じる自動ドアが内側から開けられた。

「あら、長峯さん。こんな所でどうしたの？」

デラックスが、太った体を揺すりながら、中から出てきた。

その瞬間、蓮実デラックスの脇を素早くすり抜け、ドアの向こうへと滑り込んだ。

夕華は何か怒鳴ったが、立ち止まっている暇はない。

蓮実は急いで正面のエレベーターまで向かう。ちょうど一階まで下りてきているから、今すぐなら乗れる。夕華は、デラックスの体で邪魔されて、すぐには追ってこれない様子だ。

ボタンを押すと、すぐに扉が開いた。

「待ちなさい、蓮実！」

威嚇の声を上げ、夕華はデラックスを突き飛ばし、こちらに向かつて走ってくる。

蓮実はボタンを押して、エレベーターの扉を閉める。

閉まりきったところで、ちょうど夕華の体が、扉に激突した。向こう側から咆哮が聞こえる。もはや、自分を守ろうとする人間の行動ではない。

エレベーターが動き始めた。

十階まで上がる間に、警察へ電話をかけようとする。が、繋がらない。モニターを見ると、圏外になっている。都心のマンションで通話不能になるなんてありえない。

軽くパニックになりかけたが、部屋に戻れば固定電話もあることを思い出し、気持ちを落ち着かせる。

十階に着いた。廊下を走って、飛びつくように玄関のドアを開けると、中に入るやいなや鍵をかけ、チェーンもかけ、すぐに固定電話機へと駆け寄った。

が、受話器を取り上げても、何の音もしない。

「な、ん、で」

頭の中が真っ白になる。次いで、配線の状態を確認した瞬間、胃の奥から恐怖がこみ上げてきた。

電話線が切られている。

もう一度携帯電話を見てみるが、相変わらず圏外のままだ。

「まさか——電波妨害」

映画や小説じゃないのだし、考え過ぎか。そう思い、引きつった笑みを浮かべた瞬間。

ベッド脇の窓ガラスが砕け散った。

全身を黒い防護スーツで包んだ人間が二名、室内に飛び込んでくる。ヘルメットをかぶっており、顔は見えない。

特殊部隊、という単語が一瞬だけ脳裏をよぎる。いきなりのことに悲鳴を上げる暇もなく、反応も出来ない。

一人が、蓮実の足を払い、床の上に組み伏せた。頭から叩きつけられ、クラクラする。

うつ伏せに倒れているところへ乗りかかれて、身じろぎ出来ないうち押さえつけられる。後頭部に硬いものを押しつけられた。ガチンと何かを外す音。

「標的を確保。ご指示を」

もう一人のほう、蓮実を押さえているのとは別の男が、無線を使ってどこかへ連絡する。

「……了解。射殺します」

向こう側からの命令が下されたらしい。その無線連絡をしている男の言葉を聞いて、蓮実は、自分の後頭部に押しつけられている硬いものが何であるかわかった。

銃口だ。

悲鳴を上げる。喚いたところで死期を早めるだけだと知りながら、それでも悪あがきせずにはいられない。が、強く押さえられた体は僅かも動かすことが出来ない。

引き金を引く音が、聞こえた。

発砲音が、室内に、響いた。

死んだ、と思った。

涙がこぼれ落ちた。

ところが、まだ、生きている。

（……え？）

急に身が軽くなった。

うつ伏せの状態から体を動かし、仰向けになる。

蓮実の上に乗っていた防護スーツの男は、突如現れた何者かに、腕をひねられていた。

拳銃は狙いを外され、天井へと向けられている。

力比べをしているからか、ギリギリとレザー製のスーツの軋む音が鳴る。

「貴様っ……！」

フリーになつてゐる片手で、太もものケースからナイフを抜き、乱入してきた相手に対して斬りかかった。

もう一人も拳銃を構えて、カバーに入る。

フツ、と乱入者は短い呼気の後、腕をひねつていた相手から手を離すと、ナイフによる斬撃をしゃがんでかわした。そのまま相手の脇をくぐり抜け、拳銃を構えているもう一人のほうへと飛びかかる。

銃声が響いた。

乱入者がやられたかと蓮実は思った。しかし違った。引き金が引かれるよりも早く、乱入者は相手の懐へと潜り込んでいたのだ。そのまま顎にアッパーカットを叩き込む。破壊音とともに、ヘルメットが粉々に砕け、防護スーツの男は口から血を噴き出し、空中で一回転して、後頭部から床に墜落した。

「う、お、お！」

残った一人がナイフを持ったまま拳銃を構える。が、乱入者は後ろ廻し蹴りでナイフも拳銃も弾き飛ばした。武器を失った相手は、拳を構えての徒手空拳スタイルで接近戦を挑もうとする。が、容赦なく、乱入者のストリートパンチが、ヘルメットを突き破る勢いで相手の顔面に叩き込まれた。ついでに鼻柱も砕いたのか、赤い血が宙に飛び散った。相手は、がくと膝をつき、前のめりに倒れた。

「間に合って良かった」

額の汗をひと拭き、乱入者は、倒れている蓮実に向かって爽やかに微笑みかけた。

蓮実は言葉を失う。

乱入者は、涼夜だった。

すでにわかっていることだった。それでも、この一連の事件に涼夜が関わっているとは思えなかった。思いたくなかった。



言葉にすれば日常は簡単に崩壊してしまう。だけど聞かずにはいられない。

「桐江君……これ……何が……」

言ってから、蓮実はゆっくりと立ち上がった。

「説明は後で。早くここを出ないと、それこそ部屋ごと爆破されかねないから」

手を差し伸べられる。蓮実はその手を掴むのをためらう。

「……いや」

「どうして。敵は待つてはくれない。とにかく逃げるのが先決——」

「じゃあ、どうして、電話線を切ったの？」

蓮実の言葉に、涼夜は首を傾げた。ごく自然な態度で、夕華よりも嘘をつくのが上手いな、と感じさせられた。けれども、状況からして、ごまかしは効かない。

「この黒い人達が電話線を切ったのなら、そのまま部屋に隠れてればよかったわけでしょ。わざわざまた窓を破って突入し直したりする必要はないはず。だとしたら、答えはひとつしかない。私を助けるまでバスルームに隠れてた、桐江君以外、電話線を切る人はいない」

「見てたの？ 僕がバスルームから出る瞬間」

「見えてなかった。でも、玄関が開いた音はしなかったし、窓から来たわけでもなかった。そうなると、もう、部屋の中に最初からいたとしか考えられないじゃない」

「まいったな。小学校の頃から、よく気が付く子だな、って思ってたけど」

苦笑しながら、涼夜は頭を掻いた。

その隙に、蓮実は床に転がっている拳銃を拾い上げ、構えた。涼夜はおどけた調子で肩をすくめる。

「撃てるの？」

「撃ち方は知らない。でも、撃つ。生きるためなら、桐江君でも、撃つ」

「うーん、それじゃあ赤点だな」

「赤、点？」

「そうだよ。だって、まるで現状を把握出来ていない。仮に僕が君の敵で、君に危害を加えようとしても、いまは特に攻撃を仕掛けようとせず、むしろ君を助けようとしている。だったら、君はそんな僕を利用すべきだ」

「変なこと言わないで。撃たれるのが怖いんですよ」

「怖くないさ」

嘯きが聞こえた、と思った次の瞬間には、涼夜は体が密着するくらいに接近して、拳銃を持つ蓮実の両手を、片手で押さえ込んでいた。

「!?」

「落ち着いて」

蓮実の背中に手を回して、ポンポンと優しく叩き、耳元に囁きかける。

「確かに僕が電話線を切った。バスルームにも隠れていた。そこまでは命令だったから仕方がなかったんだ。逆らうわけにもいかなかった。だけど、僕が従うのは、そこまで」

涼夜は蓮実から離れると、につこりと微笑んだ。

「ここからは君を守る。そのために僕は闘う。命を懸けて」

しばし蓮実は涼夜の顔に見惚れた。やがて冷静さを取り戻し、顔を真っ赤にしながら、プイツと横を向いた。

「そ、そんな、安っぽい言葉に、騙されたりなんか」

「信じる信じないは自由だけど、いまだけは僕を利用しなよ。とにかくここを脱出することが先決だ」

蓮実はとりあえず頷いた。涼夜の言うことだから、素直に受け入れたい気持ちもあった。

「よし、行こう」

涼夜は一直線に玄関へと向かう。その後を追いかける。ドアが開いた瞬間、銃声が聞こえ、室内の壁に穴が開いた。

「下がって。狙撃されてる」

涼夜は落ち着いた声で指示を出し、蓮実を後退させると、一度ドアを閉め、ジャケットの内ポケットに隠していたナイフを抜き出した。そこから、再びドアを開けると同時に、

「しっ！」

勢いをつけて、遙か遠くに向かってナイフを投げる。また銃声が聞こえてきたが、今度はどこにも着弾することはない。何か起きて、狙いが外れたようだ。

「よし、倒した。出よう」

合図を受けて、涼夜と一緒に外へと飛び出す。嘘みたいに平和な青空が広がっている。急いで廊下を駆けていく。一階へ降りるためには、階段かエレベーターか。廊下の壁を飛び越えれば一気に下まで行けるが、あいにく非常用の梯子を取り出しているような暇はない。まさか直で落下するわけにもいくまい。

「どうやって逃げるの」

「階段で行こう。エレベーターは何か仕掛けられているかもしれないし——!?」

涼夜は急ブレーキをかけ、足を滑らせながら立ち止まった。

「……それ以前に、退路を塞がれたね」

廊下の最奥にある非常階段から、夕華が現れた。手にはサブマシンガンを持っている。

「涼夜君、ありがとう。面倒かけちゃったね。あとは私が連れてくから、蓮実を渡して」

「ごめん。それ無理」

「は？ 何言ってるの？」

安全装置を外し、夕華はサブマシンガンの銃口をこちらに向けた。こめかみがピクピクと動いている。

「まさか女王の意志に逆らう気？ そんなことが許されると思ってるの？ それとも、何？ あのぬるい穏健派の連中に仲間入りしようってわけ？」

「人を殺すのは趣味じゃない。テロ活動も、ごめんだ」

「要は、蓮実のことが大好きなんですよ」

「は？ それこそ何言ってるんだよ」

「いいじゃん、認めれば。私と別れたのだって、人生観の違いがどうのこうの言ってたけど、昔から大好きだった蓮実のことが忘れられなかっただけですよ。そいつのことが好きで好きで仕方なかったんですよ。私、全部知ってるんだから」

堰を切ったように怨念の言葉をぶつけてくる夕華に、蓮実はずがに戸惑わずにはいられなかった。いくら疑惑が多いとはいっても、それでも友人と思っていることには変わりない。

「違う。僕は君のそういうところが、本当に——」

「はいはいはいはい、そーでしょうね！ 私なんてビッチで、蓮実みたいに頭が良くて清楚でしつかり自分を持っているような強い子が好みなんでしょうね！ だから、私なんてやることやったらさっさと捨てたんでしょ！」

夕華は激昂し、引き金を引こうとした。涼夜は腰を落とし、いつでも動けるように身構える。蓮実は涼夜の後ろに隠れた。

その時、夕華はギョツとした顔になり、目を見開いた。

「涼夜君、後ろ！」

警告を受けた涼夜は、素早く振り返ると、蓮実の体を引き崩しつつ、自身も倒れ込んだ。



その上を、刃が、走った。

あと一瞬遅ければ、胴から一刀両断にされていた。

涼夜は床を蹴り、蓮実を抱えながら、背後からの奇襲者との間合を取った。

「まさか、もう、あんたまで最前線に来てるなんてね……！」

「部下だけでは荷が重いわ」

奇襲者は、先ほどの男達と同様、特殊部隊風の防護スーツに身を包んでいる。違うのは、均整の取れたプロポーシヨンが強調されるほどに体にフィットした黒いレザースーツで、防御性には欠けているが、身動きは取れやすそうなこと。日本刀を持つていること。そして、ヘルメットをかぶらず、その秀麗な容姿をためらいもせず晒していることだ。

「あっ」

蓮実は相手に見覚えがあった。

数日前、夕華が失踪した時、警察を名乗ってやって来た二人組のうち一人。

夕華が声を張り上げた。

「涼夜君、気を付けて！ そいつは——」

「知ってるよ。会うのは初めてだけど、日本刀を武器にする女は一人しかいない」

涼夜は、蓮実が持っていた拳銃を受け取り、すかさず狙いをつけて相手を牽制する。

「アマツイクサ副隊長、麻多智<sup>またち</sup>刀子<sup>どうこ</sup>……！」

刀子はフツと笑みを浮かべ、日本刀を正眼の位置に構えた。

「麻多智!？」

聞き覚えがあるところではない。ここ数日、蓮実は何度もその名を耳にしている。ただし、現代に生きる者ではなく、遙か昔の人物として、実在したかどうかも定かではなく。

「桐江君、麻多智って、あの――」

「氣を抜くな！」

蓮実の頭を、涼夜は片手で掴んで、引き寄せた。

一瞬遅れて、元々頭があった位置を、横薙ぎに刃が走った。

狙いを外された刀子の刀は、外廊下の落下防止壁を切り裂いた。硬い材質のはずの壁面に深い切り傷が走る。蓮実は戦慄した。こんな刀で斬られたら、人間なんかひとたまりもない。

「させない！」

夕華が後ろから飛び出して、ジャンプキックを放つ。

刀子は横に体をさばくと、攻撃を外されて着地し、隙だらけの夕華目掛けて、大上段から唐竹割に刀を振り下ろした。

金属音が響く。

すでに攻撃を読んでいたのか。夕華は脚を高々と揚げ、刀子の刃を足裏で受け止めていた。刀子は口の端を歪めた。

「面白い素材のブーツね」

「これで蹴れば岩だって砕ける。その身で試してみる？」

「遠慮するわ。テロリストに殺されるくらいなら、馬に蹴られて死ぬほうがマシ」

刀子は距離を離し、一度体勢を整えると、再び刀を振って攻撃してきた。が、今度は単撃ではない。上下左右から縦横無尽に繰り出される怒濤の如き連撃だ。

「な——めるなあ！」

ほんの少しだけ気後れした様子だった夕華は、大声で自らを奮い立たせ、相手の攻撃に合わせて脚を振る。しかし、普通に立っている状態では追いつかない。ついに逆立ちし、ブラジルの武術カポエイラの如く、両腕でバランスを取ったまま全身を横回転し、脚だけで敵の全ての攻撃を弾いていく。爆ぜ、軋み、磨り、交差し、また爆ぜる。

並の人間の目には追えないスピードで繰り広げられる攻防戦は、多種多様な金属音のおかげで、辛うじて戦況が読める。

「く、う！」

攻撃を防げるのは脚に装着した特殊なブーツだけ。それだけの手段しか持たない夕華が、当然、刀子の目にも止まらぬ連撃を防げるはずもない。

「いつまでその大道芸を続けるつもり？」

刀子は突然刀での攻撃を中断し、一歩踏み込むと、逆立ちしている夕華の腹に、足刀を叩き込んだ。

「ぐっ！」

腰を折り曲げて吹き飛ばされる夕華。外廊下を転がっていく。間に守る者がいなくなり、再び刀子の脅威に、蓮実と涼夜はさらされた。

「まいったな」

すっかり恐慌を来たしている蓮実の体を抱きかかえて、涼夜は立ち上がった。目は、マンシヨンの下の道路へと向けられている。

「こんな逃げ方はしたくなかったんだけど」

とぼやくと同時に、落下防止の壁を跳び越え、空中へと身を躍らせた。刀子は怒鳴ったが、もう遅い。

浮遊感、のち落下。

蓮実は悲鳴を上げる。涼夜の体にしがみつくも、落ちていく恐怖からは逃れられない。死の影が脳裏を横切り、泣き叫んだ。二階まで落ちてきて、あわや道路に二人とも叩きつけられるか、という瞬間。

涼夜はマンシヨンの外壁を蹴った。

二人の体は落下の軌道を変えられて、若干落ちながらも、地面とは水平方向へと弾き飛ばされた。